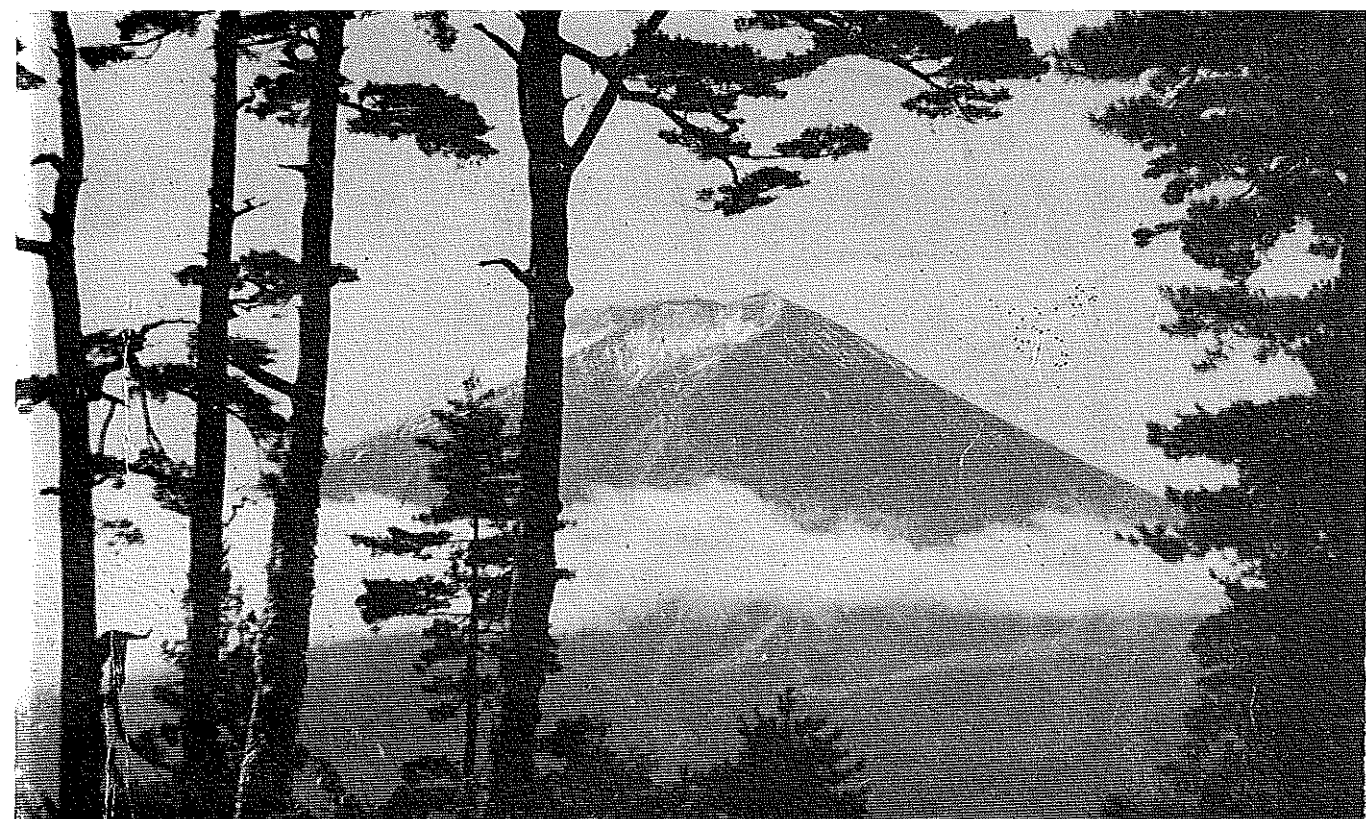


山梨県林業試験場 30年誌



昭和40年10月1日

山梨県林業試験場

山梨県林業試験場

30年誌

—1965. 10—

山梨県林業試験場

序

山梨県林業試験場は本年をもって、創立三十周年を迎えることになりました。

山梨県は全県面積の76%にあたる34万haを森林が占めるという林業県なので、林業の振興が県勢のそれに直結するといっても過言ではありません。したがって早くから林業試験の必要性が県民から要望され、昭和10年10月1日に各方面の方々の御尽力によって、林業試験場が県東南部の富士吉田市に設立されたのであります。

現在ではほとんどの府県が試験機関を所有しておりますが、当時において試験場のある県はわずか数県に過ぎませんでした。30年まえをふりかえって、関係者の方々の御理解と御努力にたいして、深く敬意を表します。

設立以来30年のあいだ、場員一同は県民の御期待に沿うべく研究業務に励み、機会あるごとに研究報告、その他を通じてその業績を発表して参りました。その成果はかならずしも満足すべきものではありませんでしたが、このたび創立30周年を迎えるにあたり、記念事業のひとつとして林業試験場がおこなっている試験研究の現況と過去の業績をとりまとめ、本書を出版しました。林業試験場の30年の歩みを提示し、県民の皆様のお御批判、御叱正を仰ぎ、試験場のこれからの指針とすることはきわめて有意義なことと存じます。

おわりに場員一同の旧に倍する努力を期待し、県民の皆様のかかわらぬ御支援をお願いいたします。

昭和40年10月1日

山梨県林務部長 松本守雄

ご あ い さ つ

山梨県は全県面積の76%におよぶ34万haを森林が占めるという林業県であります。しかもそのほとんどが民有林で、国有林はわずかに3千haに過ぎないという特徴をもっております。したがって、山梨県においては森林経営の良否がただに農山村の経済を支配するばかりでなく、富める山梨の県是にも直結する重要課題になっているといっても過言ではありません。

そこでこれら森林を合理的に経営し、その利用価値を最高度に発揮させたいという県民の強い要望がたかまり、昭和10年10月1日に山梨県林業試験場が設立されました。その後、第2次大戦をはさんで宇余曲折がありました。ここに創立30周年を迎えるに至りましたことは、ひとえに県民各位の御支援と先輩諸氏の御努力の賜と存じます。

とくに、昨年は森林基本法の成立をみ、国をあげて林業の発展がすよく叫ばれております。このようなときにあたり、場員一同、心を新たにしますます研さんを重ね、山梨県林業が直面する諸問題と取組み、県民各位の御期待に沿いたいと存じます。過去30年にわたり林業試験場に寄せられた皆様の暖かい御支援に対して心からお礼を申しあげるとともに、今後とも変らない御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

なお創立30周年を記念しまして、当场が今まで行ってきました研究業績の概要をとりまとめるとともに、その現況などについて各位にお知らせするため本書を刊行いたしました。内容のほか至らぬ点が多いと思いますが、よろしく御叱正のほどをお願い申し上げます。

昭和40年10月1日

山梨県林業試験場長 安藤 愛次

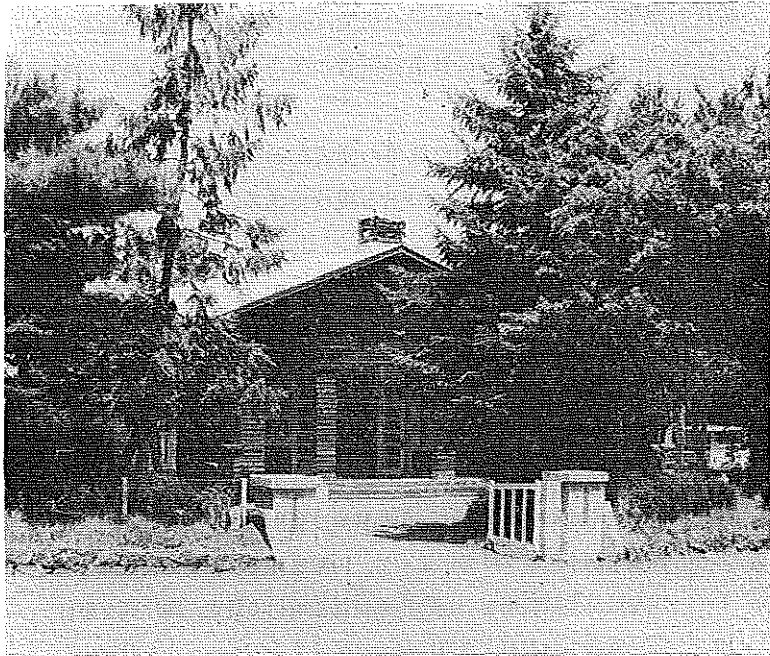
目 次

設 立 と 沿 革	1
位 置 と 施 設	6
職 員 と 予 算	10
業 務 の 内 容	
1. 造 林	12
2. 立 地	16
3. 保 護	17
4. 育 種	19
5. 経 営	21
6. 木 工	23
7. 調 査・広 報	23
林業試験場の業績	
1. 研 究 発 表	24
2. 業 績 広 報	34
林業試験場の旧職員	
1. 旧 職 員	37
2. 林業試験場の思い出	39
主なる文献の抄録	
1. 経 営	51
2. 造 林	56
3. 立 地	93
4. 森 林 保 護	102
5. 林 産 ほ か	112

設 立 と 沿 革

山梨県は中部山地にある山岳県のため、林野面積が全県面積の8割にちかい34万haにおよんでいる。他県とくらべて特徴的なのは15万haの県有林があることで、このために公私有林の面積がほとんど大半を占め、国有林が1%強にすぎない。なお、林野面積は内地の45府県のなかで23位にあたっている。

したがって山梨県においては、森林経営の適否が、ただ農山村の経済を支配するばかりではなく、県勢の消長にも直接に結びついた重要な問題になっている。そこで林地の高度利用と林産物の合理的な利用をはかるために、試験研究機関を設立することは早くから県民の強く要望するところであった。こうした世論が県議会を動かし、昭和9年に林業試験場の設置に関する議案が可決され、翌10年10月1日に当场が設立された。



正 面 入 口

発足と同時に、県下にひろく試験地が設けられたが、おもな試験項目としては、天然林の択伐、主要造林樹種の間伐、日野春グリの植栽、カラマツ林へのシラベ下木植栽などである。また、当時は家具やスポーツ用具などの木工製品及びシイタケ種菌の製造がさかんに行われていた。

こうして数年のあいだは順調に試験がすすめられていたが、第2次大戦がはじまるとともに

研究員は次々と応召し、試験場の建物は軍隊が使用したため、その後10カ年近くも試験場としての機能は停止せざるを得なかった。はじめの頃に設定された試験の資料や測定結果なども、おおくは散失してしまい、このため戦前の試験の報告としては、薪炭林と採草地に関する2篇にとどまっている。

戦後になって、ようやく世相も落付いたので、昭和22年頃から試験場としての活動が再開された。まず富士山のカラマツ造林地の調査が全場員の手によって行なわれた。その後数年のあいだは造林、保護、木工に重点がおかれ、試験場報告は昭和24年から毎年刊行されるようになった。

この頃から年とともに、わが国の経済力はまし、国民生活も安定してきたが、これにともない木材への需要は急速に高まり、国土の保全とともに森林生産力の増強が強く要望されるようになった。また一方では林業技術の普及が制度化され、昭和28年から現地適用試験がはじめられた。これにひきつづいて、民有林の適地適木調査、林木育種事業などが開始されることになった。さらに昭和39年に森林基本法が制定され、林業の進むべき道が明らかにされた。

このような時代の要求にこたえて、試験場の研究は森林総生産の増大を目的とした林業技術を確立することに重点が移され、さらに林業経営者の所得を増加するための研究も行なわれてきた。

昭和30年以降はとくに造林、立地部門の成果の発表がおおかったが、さいきんは保護、育種経営の各部門における研究も活発になりつつある現状である。

山 梨 県 林 業 試 験 場 年 譜

年 月 日	記 事
昭和9. 5. 10	山梨県林業試験場設置の要望熟し、通常県会可決によって、福地村、鳴沢村両恩賜林組合、福地村より敷地、建築費の寄附をうけ、設計者山林課勤務湯山貞技師工事施工者荒井近松氏によって建築に着手した。
昭和10. 9. 30	山梨県令第42号によって、山梨林業試験場験制 公布
昭和10. 10. 1	山梨県訓令乙第 230 号によって、山梨県林業試験場処務規程公布
昭和10. 10. 1	山梨県林業試験場を 当時南都留郡福地村に設立、開庁式を挙行
昭和10. 11. 10	北巨摩郡小淵沢村に水掛採草地試験地 0.5ヘクタールを設定
昭和10. 12. 1	山林課長技師佐藤利生 兼任にて初代場長に就任
昭和11. 2. 20	林第9号にて、朝鮮総督府農林局ほか131所に、開庁挨拶状、刊行物標本類寄贈依頼状を発送
昭和11. 4. 5	東山梨郡大和村に薪炭林改良試験地 4.62ヘクタール設定
昭和11. 4. 5	東山梨郡三富村にヒノキ間伐試験地を設定
昭和11. 4. 10	北巨摩郡小淵沢町にアカマツ間伐試験地 1.6ヘクタールを設定

- 昭和11. 4. 10 北巨摩郡日野春村に日野春栗造林試験地 0.92ヘクタール設定
- 昭和11. 4. 20 北都留郡真木村に桑林造成試験地 2.27ヘクタール設定
- 昭和11. 6. 10 西八代郡上九一色村に天然林択伐試験地 2.32ヘクタールを設定
- 昭和11. 7. 1 椎茸栽培現地指導開始, 東山梨郡岡部村ほか202ヶ町村 (昭和21年迄継続)
- 昭和11. 10. 10 横浜市主催, 家内工芸品展覧会に スキー, 菓子器ほか20点出品
- 昭和11. 10. 17 山梨県経済更生促進展覧会に 日野春栗, 生椎茸, 木工試作品等, 53点出品
- 昭和11. 11. 9 神戸市商工会議所主催, 山梨県輸出入雑貨展示会に 木彫人形 205点出品
- 昭和12. 3. 14 東京神田, 農村工業協会主催, 工芸品展覧会に 木彫乗馬人形ほか40点出品
- 昭和12. 4. 8 刊行物標本類寄贈願によって 刊行物, 全羅南道, 林業試験時報ほか141部, 標本, 秋田営林局, ぶな床板ほか44個の寄贈
- 昭和12. 6. 10 北巨摩郡大泉村に椎茸栽培試験地 0.41ヘクタール設定
- 昭和12. 8. 10 南都留郡鳴沢村にカラマツ間伐試験地 4.37ヘクタール設定
- 昭和13. 5. 1 場長佐藤利生退任, 後任場長河合慎二
- 昭和13. 5. 31 山林課吉田出張所併置
- 昭和13. 10. 10 西八代郡古閑村に椎茸栽培試験地 3.22ヘクタール設定
- 昭和14. 4. 51 椎茸栽培による傷夷軍人林業再教育開始 (昭和20年迄継続)
- 昭和15. 10. 1 吉田, 鳴沢 両組合役場, 地元関係村の寄附により, 本館44坪ほか増築
- 昭和16. 9. 1 場長河合慎二退任, 後任場長萩森隆一
- 昭和17. 4. 15 満州滨江省関東軍の依頼により 椎茸種菌を発送
- 昭和19. 4. 1 河村技手, 関東軍の要請により 満州東満総省鶏寧, 垂陽に椎茸栽培現地指導に派遣 (後日関係村に, 甲府市出身桑原氏より発生成績の報告があった)
- 昭和19. 10. 30
- 昭和19. 7. 1 山梨県林業試験場報告第1号発行
- 昭和21. 4. 1 場長萩森隆一退任, 後任場長渡辺武夫
- 昭和21. 12. 21 山梨県訓令乙第597号によって, 山梨県林業試験場処分規程改正
- 昭和22. 11. 23 福地村, 上吉田町に改称
- 昭和23. 1. 10 複製第15370号による職員住宅 34.7坪竣工 西原4109番地
- 昭和24. 1. 山梨県林業試験場報告第2号発行
- 昭和24. 4. 1 場長渡辺武夫退任, 後任場長山崎大三
- 昭和24. 7. 10 風雨により倒壊した製材所跡に, 24坪2棟の職員住宅を建設
- 昭和25. 5. 20 西八代郡上九一色村に椎茸栽培試験地 0.5ヘクタールを設定
- 昭和25. 6. 1 山梨県林業試験場報告第3号発行
- 昭和25. 6. 10 南都留郡鳴沢村にシラベ天然更新試験地 6.00ヘクタールを設定
- 昭和25. 9. 1 木工塗装室10坪, 保護研究室6坪, 暗室1坪, 増築
- 昭和26. 3. 20 上吉田町, 下吉田町, 明見町合併富士吉田市発足
- 昭和26. 7. 1 山梨県林業試験場報告第4号発行
- 昭和27. 6. 1 林第4の109号承認, 職員用公舎竣工, 敷地50坪, 建坪30坪

昭和27.	8.	1	山梨県林業試験場報告第5号発行
昭和28.	6.	1	北巨摩郡大泉村にカラマツ林地, 肥培試験地0.18ヘクタールを設定(41年迄継続)
昭和28.	10.	1	山梨県林業試験場報告第6号発行
昭和28.	10.	5	富士山, 吉田口, 船津口登山道沿に植物ラベル1,000枚をつけ, 目録をつくり以後補修管理をおこなった
昭和29.	1.	21	スライド富士山を製作, カラー133枚, 上映時間30分
昭和29.	4.	1	適地適木調査開始
昭和29.	6.	15	場長山崎大三退任, 後任場長宮郷吉之助
昭和30.	4.	1	山梨県条例第1号によって, 山梨県林業試験場設置条例公布
昭和30.	4.	1	山梨県条例第12号によって, 山梨県林業試験場諸収入条例公布
昭和30.	4.	1	調査室を新設, 図書, 文献資料の整理集中管理, 文献目録の作製に着手
昭和30.	4.	10	御坂苗畑42アール設置
昭和30.	5.	1	西八代郡上九一色村に造林不成績地の改良試験地 0.60ヘクタールを設定
昭和30.	5.	10	南都留郡中野村に寒地性樹種植栽比較試験地3.75ヘクタールを設定(60年迄継続)
昭和30.	8.	18	告示268号によって, 山梨県林業試験場諸収入条例施行規程公布
昭和31.	2.	1	場長宮郷吉之助退任, 後任場長玉木廉士
昭和31.	4.	1	林木品種改良事業着手
昭和31.	4.	10	東八代郡御坂町にメタセコイヤ現地適用試験地 1.60ヘクタールを設定(51年迄継続)
昭和32.	1.	7	庁舎狭隘の為, 吉田林務事務所新庁舎落成移転
昭和32.	11.	1	山梨県林業試験場報告第7号発行
昭和33.	2.	10	西原苗畑80アール拡張
昭和33.	4.	1	山梨県主催懸賞論文に, 「山林の効果的な高度利用について」 団体の部に入賞
昭和33.	4.	1	西原苗畑に温室15坪を建設
昭和33.	6.	1	場長玉木廉士退任, 後任場長佐治秀太郎
昭和33.	5.	1	富士吉田市上吉田に採種圃集植所18ヘクタールを設定(55年迄継続)
昭和34.	1.	14	山梨県訓令甲第1号によって, 山梨県林業試験場処務規程改正
昭和34.	3.	1	山梨県林業試験場報告第8号発行
昭和34.	4.	10	南都留郡鳴沢村に耐寒性樹種比較植栽試験地1.00ヘクタールを設定(64年迄継続)
昭和34.	5.	10	南都留郡河口湖町にストロブマツ現地適用試験地 1.30ヘクタールを設定(54年迄継続)
昭和35.	4.	10	富士吉田市上吉田に落葉病防除試験地 0.50ヘクタールを設定(44年迄継続)
昭和35.	12.	1	山梨県林業試験場報告第9号発行
昭和36.	3.	27	告示第51号によって, 山梨県林業試験場諸収入条例施行規程
昭和36.	4.	1	場長佐治秀太郎退任, 後任場長高橋清
昭和36.	4.	10	富士吉田市松山に導入交雑育種試験地 0.35ヘクタールを設定(46年迄継続)

昭和36.	5. 10	南巨摩郡富沢町に成木材施肥試験地 0.2ヘクタールを設定 (49年迄継続)
昭和37.	3. 1	山梨県林業試験場報告第10号発行
昭和37.	5. 1	場長高橋清退任, 後任場長安藤愛次
昭和37.	9. 1	山梨県林業試験場報告第11号発行
昭和37.	12. 10	訓令甲第53号によって, 山梨県林業試験場処務規程改正
昭和38.	2. 1	古越技師, 林木の交雑育種に関する海外研修のため, 米国南西部林業試験場, スエーデン育種協会研究所に派遣
〃	9. 6	
昭和38.	4. 1	国土調査開始
昭和38.	4. 26	YBS山梨放送テレビにて, 林業試験場をたづねて, を放送
昭和38.	5. 1	南都留郡鳴沢村にカラマツ種子の生産試験地 2.50ヘクタールを設定
昭和38.	6. 10	富士吉田市上吉田に林地除草剤試験地 0.2ヘクタールを設定
昭和38.	6. 10	都留市開地に寒害防除試験地 3.30ヘクタールを設定 (42年迄継続)
昭和39.	7. 1	新職員公舎建設のため, 旧公舎30坪, 苗畑の一部を取壊す
昭和39.	3. 1	山梨県林業試験場報告第12号発行
昭和39.	5. 1	北巨摩郡小淵沢町にアカマツ採種圃 3.00ヘクタールを設定 (50年迄継続)
昭和39.	8. 1	記録映画「富士山の害虫防除」製作 8ミリカラー 200呎
昭和40.	3. 1	山梨県林業試験場報告第13号発行
昭和40.	3. 31	山梨県条例第15号によって, 山梨県林業試験場設置条例改正
昭和40.	6. 6	NHKテレビ「話題の広場」にて富士山壁かけ彫刻を放送
昭和40.	8. 1	山梨県林業試験場30年誌編集開始
昭和40.	8. 19	安藤場長, 林業試験研究機関視察団員として, スエーデン, デンマーク, 西ドイツ, フランス, イギリス, スイス, イタリアへ派遣
〃	9. 26	
昭和40.	9. 1	創立30周年一般公開準備着手

位置と施設

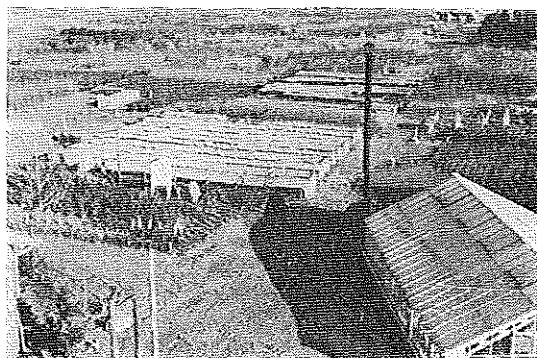
林業試験場は富士山の北麓、富士吉田市上吉田にあり、県の東南部にあたる。標高が850 mにおよぶため年平均気温は 11°C を下まわり、高冷地といえることができる。当场への交通は、中央線のばあい大月駅で富士急行電鉄に乗りかえ、富士吉田駅で下車するか、甲府から富士急行バスを利用するかである。電車は1時間、バスは約2時間かかる。東海道線のばあいは国府津または沼津で乗りかえ、御殿場で下車し、富士急行バスを利用すれば1時間で富士吉田駅に着く。試験場は富士吉田駅から富士登山道を歩いて10分のところにあるが、バスでは山中湖の方へ3つ目の停留所が林業試験場前になっている。

庁舎は木造の平家建てで3棟に分れているが、建坪は 750m^2 、敷地は 2710m^2 である。このなかに 50m^2 の実験室が3部屋あり、土壌と植物体の分析、種子の発芽検定、菌類の培養などをおこなっている。図書室は 70m^2 の広さで、約10,000部の刊行物と700冊の図書とが収容されている。刊行物は場内で製本しているが、その数は1,600冊である。文献はパンチカードを用いて整理し、欠号などはマイクロフィルムで保存している。このほか天秤室、暗室、木工場、種菌の培養室などがある。また植物、林木種子、材鑑、昆虫、土壌、岩石などの標本を陳列し、また構内に植えてある見木樹にはラベルをつけ展示している。

職員の公舎は2棟あり、その敷地は合計して 224m^2 である。

苗畑は試験場の敷地に隣接した西原がもっとも広いが、甲府盆地の中にも御坂苗畑を所有している。また富士吉田市内には2ヶ所の借地苗畑がある。

西原苗畑には、 50m^2 の温室と 10m^2 の電熱温床とがある。温室は鉄骨製で温水式により暖房している。また構内には 15m^2 のガラス室がある。



西原苗畑全景

第 1 表 試 験 苗 畑

名 称	位 置		所 有	面 積 アール	試 験 項 目	設 定 年
	郡 市	町 村				
御 坂	東 八 代	御 坂	県	42	スギ品種の適応	1955
西 原	富 士 吉 田	上 吉 田	県	75	育苗, 育種	1958
美 蓉	富 士 吉 田	上 吉 田	私	30	育苗, 育種, 特産	1954
赤 坂	富 士 吉 田	松 山	私	40	育苗	1960
	北 巨 摩	長 坂	県	1	導入育種	1964
	東 八 代	御 坂 町	私	1	線虫防除	1964
	南 都 留	河 口 湖	私	0.3	〃	1964
	富 士 吉 田	上 吉 田	国	0.3	〃	1965

このほか、富士山の北麓、甲府営林署の諏訪ノ森苗畑に寒地性樹種の育苗試験苗畑があり、山中湖畔には東京大学との協同試験である寒地性樹種の育苗試験苗畑がある。

試験林は25項目で68カ所に達し、県下の各地に設定されている。

第 2 表 試 験 林

部 門	位 置		所 有	面 積 (ha)	試 験 項 目	設 定 年
	郡 市	町 村				
造 林	北 巨 摩	大 泉	県	0.18	林地肥培 (マル山肥料)	1953
	〃	小 淵 沢	〃	1.66	人工林の間伐 (アカマツ)	1936
	〃	〃	〃	3.00	採種圃 (アカマツ)	1964
	〃	長 坂	〃	0.20	交雑育種 (カラマツ)	1964
	東 山 梨	三 富	社	0.12	林地肥培 (スーパー化成)	1959
	〃	牧 丘	県	0.08	寒地性樹種 (シラベ)	1959
	〃	〃	〃	2.00	外国樹種 (ストロブマツ)	1964
	甲 府	宝一丁目	私	0.20	クリ品種比較	1956
	中 巨 摩	櫛 形	県	4.00	外国樹種の比較植栽	1965
	東 八 代	御 坂	〃	1.60	外国樹種 (メタセコイヤ)	1956
	西 八 代	上 九 一 色	〃	2.32	天然林の択伐	1936
	〃	〃	〃	0.60	造林不成績地の改良	1955
	北 都 留	上 野 原	私	0.15	苗木形態と植栽方法 (スギ)	1965
	都 留 市	大 野	〃	0.09	外国樹種 (メタセコイヤ)	1964
	〃	鹿 留	県	0.03	〃 (ヨーロッパトウヒ)	1961

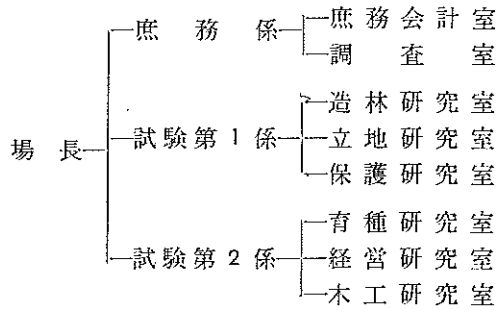
造 林	南 都 留	河 口 湖	県	1.30	外国樹種 (ストローブマツ)	1959
	〃	足 和 田	私	0.30	導入育種 (スギ)	1964
	〃	鳴 沢	県	0.68	成木林施肥	1963
	〃	〃	〃	1.30	外国樹種 (ストローブマツ)	1959
	〃	〃	〃	1.30	〃 (ストローブマツ)	1959
	〃	〃	〃	0.10	林地除草剤 (下刈)	1963
	〃	〃	〃	1.00	耐寒性樹種比較	1959
	〃	〃	〃	2.50	種子の生産 (カラマツ)	1963
	〃	〃	〃	0.30	施木林施肥 (カラマツ)	1963
	〃	〃	〃	6.00	シラベ天然更新	1950
	〃	山 中 湖	〃	3.75	寒地性樹種比較	1955
	富 士 古 田	上 吉 田	〃	18.00	採種圃集植所	1958
	〃	〃	〃	1.85	交雑種植栽	1964
	〃	〃	〃	0.48	林地肥培 (肥料種)	1959
	〃	〃	〃	0.20	林地除草剤 (地拵)	1963
	〃	松 山	私	0.35	導入交雑育種 (ポプラ, カラマツ)	1961
	〃	上 吉 田	県	0.09	苗木形態と植栽方法 (アカマツ)	1963
	〃	〃	〃	0.12	〃 (カラマツ)	1963
	〃	〃	〃	0.12	〃 (シラベ)	1963
	〃	〃	国	0.10	寒地性樹種の育苗	1965
南 巨 摩	身 延	公	1.00	スギ品種の適応	1959	
〃	富 沢	私	0.25	〃	1959	
〃	〃	社	0.36	林地肥培 (スーパー化成)	1962	
〃	〃	〃	0.24	〃 (マル山肥料)	1954	
〃	〃	〃	0.20	〃 (住友1号)	1961	
保 護	東 山 梨	牧 丘	私	1.50	寒害防除	1964
	甲 府	黒 平	〃		ナメコ優良系統選抜	1965
	東 八 代	御 坂	県	0.18	寒害防除	1963
	西 八 代	下 部	私	0.50	シイタケ栽培	1962
	都 留	開 地	県	3.30	寒害防除	1962
	南 都 留	道 志	公		ナメコ優良系統選抜	1965
	〃	足 和 田	私	0.30	寒害防除	1964
	〃	山 中 湖	県	0.50	カラマツ腐心病防除	1961
	〃	〃	〃	0.50	コガネ虫防除	1963
	富 士 古 田	上 吉 田	私	0.50	落葉病防除	1960

保 護	富士吉田	上 吉 田	国	0.10	土壤線虫防除	1965
	〃	〃	県	1.00	カラマツメタマバエ防除	1963
	〃	〃	〃	3.00	カラマツマダラメイガ防除	1964
	〃	〃	〃	1.00	〃	1964
経 営	北巨摩	双 葉			私有林業実態調査	1964
	東山梨	牧 丘			〃	1964
	北都留	上野原			〃	1964
	南都留	鳴 沢			〃	1964
	南巨摩	富 沢			〃	1964
	北巨摩	須 玉			〃	1965
	東八代	御 坂			〃	1965
	南都留	早 川			〃	1965
	北都留	秋 山			〃	1965
	南都留	山中湖			〃	1965
	甲 府	丸ノ内			郷土みやげ品委託販売	1964
	南都留	河口湖			〃	1964
	〃	山中湖			〃	1964
南巨摩	身 延			〃	1964	

試験苗畑および試験林の72ha余のうち、県有地が90%の65haを占めている。私有地が5%の3ha強で、ついで公有地、社有地、国有地の順になる。

職員と予算

山梨県林業試験場は下記の機構によって運営されている。



3係、8室にわかれ、職員15名と22条職員3名の計18名からなっている。うち研究員は場長以下10名である。

第3表 林業試験場の職員

職名	氏名	分掌事務
場長	安藤愛次	
庶務係長	関戸操	庶務および会計全般、出納員
試験第1係長	遠藤昭	試験第1係全般および森林保護
試験第2係長	林良次	試験第2係全般および経営
主事	武藤清子	庶務および会計補助
主事	大森喬子	試験事務一般
技師	小林福治	造林
技師	古越隆信	林木育種
技師	斉藤敬文	育苗および林木育種
技師	石原義久	木工
技師	渡瀬彰	森林保護および食用菌
技師	馬場勝馬	造林
技師補	雨宮嘉彦	森林立地
農務員	広瀬弘江	苗畑管理
庁務員	渡辺数枝	雑役

(昭和40年9月現在)

昭和39年の予算について概説するとつぎのとおりである。

才出予算では一般会計の試験場費は職員の俸給をのぞくと563万円で、才入予算はシイタケナメコ種菌売却代60万円と木工製品が20万円となっている。

支出の面では研究補助者などの人件費が占める比率がたかく、また苗畑の維持管理、電気、水道料あるいは燃料費というような経常費が多額にのぼり、試験費といえるのはごく少額になっている。

以上が一般会計であるが、このほか特別会計に苗木生産改良事業、適地適木調査事業、材積表の検討など200万円がある。

昭和38年から40年度の予算の推移を下表にしめた。

第4表 林業試験場予算 (千円)

科 目	昭和40年度		昭和39年度		昭和38年度	
	金額	%	金額	%	金額	%
収 入	590	74	826	104	798	100
才 出	7,787	113	7,677	112	6,892	100
一 般 会 計	5,745	119	5,630	116	4,839	100
造 林 試 験	456		592		523	
保 護 試 験	529		239		236	
育 種 試 験	608		533		476	
経 営 試 験	631		464		327	
生 産 事 業	246		430		409	
管 理 費	2,769		1,972		2,074	
国 庫 補 助	506		1,400		794	
特 別 会 計	2,042	99	2,047	100	2,053	100
材 積 表	110		100		137	
苗木生産改良	1,032		1,497		1,466	
土 壌 調 査	900		450		450	

(昭和40年9月現在)

昭和40年度はシイタケ、ナメコの種菌生産など事業的な業務を縮少し、試験研究業務に重点をおく方針となったため、収入予算が減少している。

業 務 の 内 容

当試験場は県の総面積の75%を占める民有林および恩賜林（県有林）の改良発展をはかるため、つぎの業務をおこなっている。

1. 林業経営の改善に関する試験研究及び調査
2. 森林生産力の増強に関する試験研究及び調査
3. 森林病虫害の予防駆除に関する試験研究及び調査
4. その他林業技術の改良発達に必要と認める事項

そして現在は、国の林業政策に基づき木材の需要増加に応えるべく研究の重点を森林資源の増殖に置き、関連する造林、立地、保護、育種、経営の各試験を活発におこなっているが、そのほか観光立県の施策に即応した郷土観光土産品の試作研究ならびに農家所得の増加をはかるためのシイタケ、ナメコ種菌の培養等に全職員一丸となり鋭意努力している。

昭和40年度における試験項目と今後の問題点はつぎのとおりである。

1. 造 林

1) 苗畑土壤の検定

県内の種苗業者および林務事務所から依頼をうけて、苗畑土壤の理化学性をしらべ、希望によっては苗畑ごとに施肥設計の指針を示している。昭和27年より業務をおこなっているが、年を経るごとに件数をまし、最近では100点ちかくの検定をおこなっている。また昭和38年までに分析した470点の資料をもちい、県下各地域の苗畑土壤の特徴を解析した。

苗畑の適正な施肥量の算定は極めて難しい。各苗畑の育苗法、土壤条件、その年の気象条件などにより施肥量が異ってくる。したがって毎年の育苗成績から各苗畑にあった施肥量を検討する必要がある。育苗にあたって問題になる点の一つとして土壤病害があげられる。病害と土壤の理化学性についての基礎的な研究はあるが、現実の苗畑については実証試験をしてみる必要がある。

2) 寒地性樹種の育苗

シラベの山出苗はタネから育苗することが極めて困難である。過去に試みたマキツケの試験をまとめると次のようになる。

1. 胚の活力検定を行なうとかなり活力のある種子があるが、実際に発芽するものはすくなく

でも発芽がよくしかもよくそろろう。したがって低温処理が発芽促進に有望である。

2. 一度発芽したのも成葉が出るまでにかれてしまうが、その理由は立枯病と乾燥である。
3. 天然の稚苗は厚い粗腐しよくと土壌との間に根系が発達しているので、粗腐しよくはシラベ苗の発育に欠くことができないようである。

シラベ苗の需要はかなりある。現在のように山引苗にのみ頼ることは、天然苗に限度があり林地の保全上も問題があるので、タネからの育苗技術を攻究しなければならない。そのためにはいままでの試験を整理し、まず発芽促進、ついでマキツケ床における立枯病の防除ならびに床面の乾燥を防ぐ手段を講じなければならない。さらに生長促進を計り育苗年限の短縮も考えねばならない。

3) 苗木形態と植栽方法

昭和38年に富士山ろくにアカマツ、カラマツ、シラベの植栽試験地を設け、苗木の形質と植栽方法をかえて、苗木の活着とその後の生育状況をしらべている。アカマツは植栽方法が、カラマツは苗木の形質が造林成績と関係が深いようであった。

さらに昭和40年に県東部の上野原町ヘスギの植栽試験地を設定し、現行の規格苗別の造林成績、植栽方法と造林成績および肥培、寒害予防処理との関係について検討を加えている。

現行の山行苗規格は苗木の形、大きさによって決められているが、本質的にいって苗木の良否は植栽後の造林成績によって決まるものである。この意味において、山行苗の規格を再検討する必要がある。

植栽方法の精粗は造林成績に深い関係をもっている。労力不足もさりながら、植付技術に再検討を加え、効率のよい造林事業を進める必要がある。また、樹種、立地条件により反応に差異がみとめられるので引続いて試験をおこなうとともに、肥培効果および下刈期間の短縮について検討を加えていく。

4) 薬剤による林地除草

供試した主な薬剤は塩素酸系、2・4-D系、スルファミン酸アンモン系であるが、枯殺効果をみると塩素酸系のものがよかった。また剤型では水和剤がまさったが粉剤でも造林木にかからなければ水和剤と同様の効果がみられた。粒剤は枯殺効果の点で問題が残っている。新芽の伸びはじめにまくと、一度枯れても再生してしまうので夏期施用の方が薬効が著しかった。また今までに試験したのはスギ、アカマツ、カラマツ、シラベ造林地であるが、上記の順に薬剤に対する抵抗性は低下した。地埒地の処理試験ではバンベル水和剤を切株に施すと効果がみられたが、薬価が高いのが問題である。

林業機械と組合せた林地除草の体型化が確立されねばならない。この場合造林地は植生、地形あるいは周辺の労務事情などによってまちまちなので、その地方ごとに適した体系を考える

必要があろう。撒布機を使用するときは、手まきとまきむらの差、吹きつける強さによる効果のちがいを検討する必要がある、風にとばされにくいような増量剤をつかうことも考えられる。植栽方法も従来の方形植より並木植の方が有利と思われる。薬剤そのものについては価格を下げることはもちろんであるが、殺ソ剤あるいは肥料との組合せ、すなわち薬剤の複效化も今後研究されてよい問題であらう。

県内の地域ごとにどのような下刈単価、時期、方法などについて経営研究室とも協同して調査してみたいと考えている。

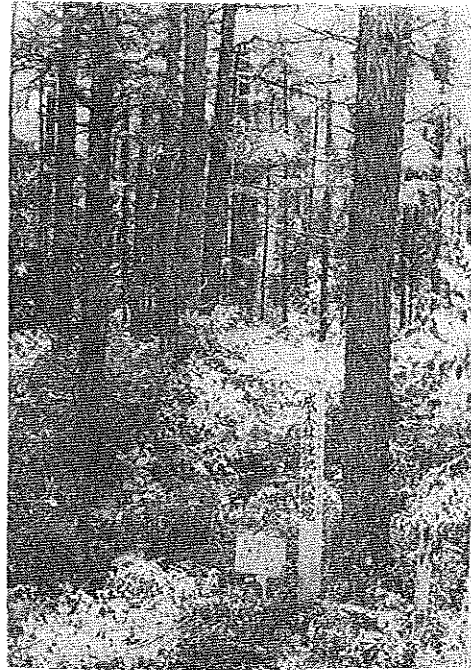
5) 林地肥培

伐期の短縮と地方低下の防止を目的として林地肥培がとりあげられて10数年になる。山梨県では昭和28年から幼令林に対して固形肥料の適量試験地を設定し、昭和34年から高成分の粒状肥料を用い、スギ幼令林、壮令林に対して施肥効果の検討をおこなっている。さらに昭和38年から富士山ろくのカラマツ林に対して成木施肥試験地を設定し、現在9試験地を管理している。

幼令林の施肥はカラマツで30%、スギで100%の材積増をみとめたが、成木林ではいまのところ顕著な効果をもとめていない。また、アカマツはカラマツより肥培効果がでにくい傾向がある。

樹種により肥培効果に差異があるので、樹種にあった施肥位置、肥料種、施肥量、施肥期、植え方、立地条件などを考慮した施肥方法の再検討が必要である。育種事業の進展にともない採種圃の肥培試験も重要問題となろう。

また、林木の栄養条件と病虫害の発生は密接な関係にあると考えられる。たとえばカラマツ落葉病と施肥との関係を試験しているが、この面への検討も進める必要があろう。さらに林木の寒害が発生しているが、施肥による耐寒性の付与も今後の問題である。



成木林施肥試験地

6) 寒地性樹種の育林

林野面積の20%が亜寒帯である山梨県では、奥地林の開発とともに寒地性樹種の育林が重要となってきた。

そこでシラベ、ウラジロモミ、トドマツ、エゾマツ、ヨーロッパトウヒ、ヨーロッパアカマツなどを加えた比較植栽試験地を昭和31～38年に山中湖畔に、昭和34年に富士山2合目にそれぞれ設定した。また肥料の用量、植栽の深さなどとこれら樹種の生育との関係を苗畑で試験し、樹種の特長把握につとめるとともに、既往の造林地における生育調査をおこなっている。

寒地性樹種とくにシラベの造林は、今後カラマツにかわって積極的にとりいれる必要がある。そのためには次の諸問題を解明する必要がある。

従来、山引苗を使用していたが、均一で大量の良苗を確保するためには実生苗の養苗技術の確立が前提となる。シラベは立地条件による生育差が大きいので、実態調査をおこない樹種の特長を把握して、適地判定の基準を作り、採算性を加味した造林可能地域を明らかにする。

造林の難易、経済性などから天然更新の地域区分をおこない、さらに更新、保育の方法に再検討を加える。

7) 導入樹種の比較植栽

森林資源が年々減少する傾向にあり、その対策として生育旺盛な樹種、あるいは奥地に成林可能な耐寒性の強い外国樹種を導入しようとする気運がたかまっている。

そこで昭和33年からメタセコイアを、また昭和34年からストロブマツについて苗畑での施肥試験、スギ、アカマツとの山地比較植栽試験地を設け、それぞれの樹種の適応性を究明することにつとめてきた。この2樹種のほか、ヨーロッパトウヒ、ユーカリ、イタリーポプラなどについても適応試験あるいは実態調査をおこなった。

とくに力を入れたメタセコイアとストロブマツについては次のとおりである。

メタセコイアは土地条件に敏感で生育差がおおきいが、植栽方法や施肥により造林成績を向上させたい。また、側枝が発達しすぎ幹型がわるいので、側枝のせん定、系統選抜の必要がある。また、耐寒性について検討し、直挿し技術を究明する。

ストロブマツは亜高山地帯の有望樹種であるが、冬期の寒風によって乾燥害が発生しているので、耐寒性について再検討を加え、列状混植や保育方法の検討が必要と思われる。

8) 特用樹種の栽培

ユーカリの造林試験を昭和29年よりおこなったが、本県には不適であり、成林しなかった。

クリの26品種を用いた比較植栽試験地を昭和31年に設定し、生育、結果をしらべクリタマバチに対する抵抗性を検討している。いまのところ生育はおおむね交配品種がよく、クリタマバチに対しては山梨県の在来品種が弱いことが判明した。

キリの栽培試験を昭和33年からおこなったところ、キリはジベレリンによく反応した。しかし、伸びにくらべて太りが伴わない欠点が認められた。

林地の生産性を高める意味でクリの山地栽培がおこなわれるようになってきた。そのため、場所の選定に注意しないと寒害の発生が予想される。クリの胴枯病菌は寒害の被害部から侵入するといわれるので、とくに適地判定の基準を作成する必要がある。

抵抗性品種が選抜されたのでクリタマバチの危険は去ったが、これにかわって西日本でハンノキキクイの被害が発生している。発生予察に留意し、早期に駆除するとともに、抵抗性品種の選抜が望まれる。

集約な取り扱いが難かしいが、山地栽培林の場合に適合した管理技術の体系を確立する必要がある。

2. 立 地

1) 林野土壤の調査

林業は収穫までに長い年月がかかるので、まず立地条件に応じて植栽樹種をえらぶことが大切である。そこで林野庁では造林事業を科学的に推進してゆくために、昭和29年度から民有林の適木調査に着手した。

本県では林業試験場がこれを担当し、昭和39年度までに約41,000haの林野土壤の調査を完了し、5,000分の1の土壤図を作成した。これは林野面積の約9分の1にあたる。

さらに、特殊森林土壤（黒色土、受触土、岩屑土など）をしらべて、それらの山梨県における分布図をつくった。

また、空中写真により地形解析をおこなってあらかじめ土壤分布の予察図をつくり、これと現実との適合性を検討した。

昭和40年度にはこれらの調査の結果にもとずき、また一部の補正調査をおこない、全県林野の土壤図を20万分の1の縮尺によってつくる予定である。適地適木が全県下にひろく浸とうするためには、林業関係者の知識の向上が望まれる。すなわち、普及活動をより盛んにして、適地適木技術の浸とうにつとめることが必要である。



土壤型と林木の生長

2) 林地生産力の推定

林木の生長は自然的な環境要因に左右されることがおおいが、これらのうち、とくに決定的な支配力をもつ土壌の実態を解明する必要がある。従来の研究によれば土壌因子が地方により異なるし、また同一土壌型であっても生産力にかなり差がある。

これらの点を解明するため、土壌を中心とし気候、地質、地形、植生などの土地条件に関して、それぞれの地域における環境区分をおこなった。またこの区分と林木の生長との相関関係を明らかにするため、気象学で用いられていた相関説明図を応用して、帰納的に林地生産力を支配する環境因子を抽出し、材木の生長を予測した。

昭和40年度においては、国の連絡試験として、県内に5調査地をえらび（早川町、須玉町、御坂町、秋山村、中野村）、対象樹種をスギ、カラマツとし、林分調査および土壌断面調査、土壌分析をおこなう。

これらにより、全県的な林木の生長予測から、さらにキメの細かい地域的な樹種ごとの生長予測法を確立したい考えである。

3. 保 護

1) 林木の寒害防除

拡大造林の進展とともに人工林が奥地になり、寒害が多発し問題になった。そこで昭和36年、37年の2回にわたり県下に発生した寒害の実態調査をおこなったところ、それぞれ170万本、190万本の被害本数をかぞえた。また、被害の発生は標高、方位、傾斜などの立地条件と相関がたかく、スギ、ヒノキの造林は標高700~1,200mのところは寒害の要注意地（方位、傾斜に注意し）、1,200m以上が常習地と考えられた。昭和38年には、2団地において被害症状の分類と発生環境との関係を明らかにし、39年は各種造林の作業方法をかえた試験地を設定し、冬期間の気象観測、被害の防除方法を検討している。

寒害の発生原因は単因子の場合がまれで、おおくはいくつかの要因の複合によるので、それぞれに適合した防除方法が要求される。

被害は幼令林におおいので、苗木、植栽方法、初期の保育、施肥などに充分検討を加える必要がある。また、混植の採用により、安全性を確保することが考えられるが、樹種の組合せ、保育などの点で問題が残っている。さらに防風林の設置についても林況、地形との関連において防除効果の把握が必要である。なお耐寒性品種の選抜は恒久的な解決策ではあろうが、今後に残された課題である。

2) 病虫害の防除

立枯病の発生は、磷酸肥料の施用と深く関係があり、木さく液の土壤消毒によって初期の発生を減じ、また線虫の密度を低くすることによって、得苗率と苗木の生育を向上しうることを確かめた。

針葉樹の腐心病を富士山、秩父山地で調べ立地条件との関係を究明するとともに、菌の接種試験地を設定し、木材の腐朽速度を調べている。

カラマツマダラメイガは、9月中旬よりも8月上旬の若令幼虫期にBHCを空中散布するほうが効果的である。また、カラマツメタマバエは4月中旬の羽化期を適確におさえて、BHCくん煙剤で駆除すればかなりの効果が期待できる。

苗畑の線虫は虫の種類、密度と実害との関係を明らかにするとともに、生育期に安全に使用できる殺虫剤を開発し、使用方法を検討する必要がある。

針葉樹の腐心病はさらに調査をつづけ、立地条件と被害発生との関係を検討する。また腐朽速度から、菌が浸入した林令を推定し、木材の実害としてあらわれない林令を把握したい。

カラマツメタマバエは羽化期を適確にしらべて効果的なくん煙をおこない、さらに天敵について調査研究する必要がある。



ヘリコプターによるBHCの空中散布

3) 突発害虫の発生予察

近年カラマツ造林地に害虫の発生が目立ち、おおきな被害がみられる。とくに富士山ろくではスジコガネ、オオスジコガネ、カラマツマダラメイガ、カラマツメタマバエ、カラマツタネバエなどが多発している。

昭和25～26年にせん孔虫の生態調査をおこない、昭和26～28年にコガネムシのそれをしらべ

た。さらに昭和38年より10カ所の固定観測林を設定し、虫の発生活消長調査をおこない、被害状況、虫の生態、密度などから被害の発生予察をおこなっている。

カラマツメタマバエはカラマツ壮令林の花芽に寄生しているため、資料の採取が困難である。このため羽化期について室内飼育と現地との差を推定する必要がある。おなじことが土中で越冬しているカラマツマダラメイガ、ユガネムシ類についてもいえる。一般に食葉性害虫による被害が林木の生長をどの程度抑制しているのかを知る必要がある。

4) 食用菌の栽培

シイタケに関しては昭和25年より各菌種の比較栽培をおこない、発生量と形質をしらべて山梨県産の3つの優良系統を選抜した。また昭和29年より不時栽培の技術について基礎試験をおこない、昭和35年より不時栽培に適すると思われる8系統について比較栽培試験をおこなった。

ナメコに関しては昭和34年より7樹種について原木としての適否を検討し、40年度に26系統のナメコを用いて、優良系統の選抜試験地を県下の3カ所に設定した。

シイタケの生産量は急増し、とくに不時栽培の占める割合が大きくなっているため、不時栽培用のフレームまたはガラス室の構造についてさらに検討を要する。また、保温、保湿の方法とともに発芽に適した温度の調節について究明する必要がある。原木林を肥培管理し、原木確保とともに施肥木の原木としての良否をしらべる。また、キノコの乾燥方法について検討する必要がある。

ナメコは発生期が短いことが欠点であるため、発生期のちがう系統の選抜が急がれる。また、ナメコ栽培適地の地域区分を試み、産地形成を行なって加工工場の効率化を進める必要がある。

4. 育 種

1) 林木種子の検定

1957年2月に林木種子検査規則を設けた。この規則には常法と還元法を併用して行なうように定められていたが、しばしば人員施設の点で無理があったため、還元法のみで検定結果を出したことがある。

そこで1965年3月に過去8カ年間に両法を併用した約100点の試料について、その検定結果をとりまとめ、還元法の適用し得る範囲について検討した。その結果アカマツ、カラマツについてはタネの新古、発芽率、採取年に関係なく、常法と還元法の値がよく一致することがわかった。

アカマツ、カラマツ以外の樹種にも還元法を適用させるには、還元法の実験方法を改善した

ければならない。それには粒が細かくて種子の切断を完全にしにくいスギ、ヒノキの場合と、樹皮と胚の間にヤニを多量に含んでいるため、鑑定液を十分に吸収できないモミ属（シラベ、ウラジロモミ）の場合とについて検討する必要がある。

2) 林木種子の生産

主として2つのテーマをとりあげた。そのひとつはカラマツの着花促進処理に関するものである。1963年から富士山の御庭に分布している天然カラマツ林で試験をした結果、花芽の分化には秋にリン酸を施肥することが著しく有効であった。もうひとつは、主として県内母樹林の遺伝的再検討である。これは1960年以来県の種苗行政担当係と共同で、母樹林別に採取したタネから育苗したものを計画的に比較植栽し、母樹林の特性をとらえようとするものであり、1964年までに育苗を完了しアカマツはすでに試験地を設定した。

カラマツの着花促進は母樹の栄養生理的な問題を扱ってきたが、今後はさらに母樹に対する機械的な処理効果を検討し、実用化を計る。また母樹林の比較試験は過去の育苗経過から開芽期、秋伸び、苗木の形態などからある程度の特性を明らかにするとともに山地試験を推進する。



山梨県宮富士採種圃とクロン集植所

3) 造林樹種の交雑育種

スギは1962年に着手したが、主として耐寒性の組合せを考慮した県内産クロンを中心にして、これに東北、裏日本産のものと表日本少雨地帯のものをもちい交雑した。第1回に交雑したタネをもちい1963年から育苗をおこない1964年に山出苗を得た。またカラマツは雑種強勢を目的として世界に分布している主なカラマツ6種の雑種を入手し検定林を造成しつつある。ただしカラマツは交雑が容易でないため、すでに雑種を創った内外の機関から苗木またはツギホを入手して実施した。すなわち、東洋系カラマツは北海道から、西洋系カラマツはデンマーク、フィンランドの2国からそれぞれ入手した。

スギの交配については、過去の実験によるとねん性のきわめて悪い組合せが出たため、検定

用苗木の数量が充分にそろわないという難点がある。そこで、今後は母樹の選び方、交配能力テスト、交雑園における個体または集団の開花期調査などを行なって再検討する必要がある。またカラマツについては、プロジェクトにより有望な組合せが明らかにされた場合、実用的には、混合採種園を造成しなければならないが、それに備えてそのもととなるそれぞれの原種の開花結実習性についても、いまから調査研究をすすめておかなければならない。

4) 林木品種の適応性

この分野でとりあげたのは、スギの在来品種、広葉樹および外国樹種である。スギの在来品種は県内の代表的な内陸気候区に属する御坂町尾山に全国から103系統を集めて集植し、そこで生育良好なものをさらにそれぞれの特殊環境地帯に移して適応性を検討している。スギ実生系統はすでに10年生以上になったので、第1次選抜の結果が報告されているが、サシキ品種については現在検討中である。広葉樹ではポプラを扱ったが、とくに富士山ろくのセキ悪寒冷地への適応品種の選抜を行なった。外国樹種は北米および北欧産のマツ属について寒冷多雨地帯における育苗の難易度を検討した。

導入後の生育経過から本県における各系統の特性をとらえて、有望な系統はその実用化を計る。またこの中で有望な特性をもった個体は交雑母材料として活用し、より優れた個体の創成をはかる。

5. 経 営

1) 林業生産技術の体系化

林業生産を増大するためには経営の合理化をはかることがきわめて大切なことである。

山梨県の私有林をみると山林の所有機模と生産活動においてかなりはっきりした地域差がある。このような地域において、従来からおこなわれている造林から伐出までの林業生産技術を調査して、各地域に適応した技術の組合せ方式を確立する。

昭和39年度においては県下5森林計画区よりそれぞれ1町村をえらんで、林業技術の実態調査をおこなった。

昭和40年度には早川町、須玉町、御坂町、秋山村、山中湖村の3町2村において調査する計画である。

立地条件に応じた合理的な林業技術体系が確立されべきである。

社会状況の変化に応じて、どのように林業技術体系を適応させていくべきか、その方法を検討する必要がある。

土地利用との関係において、林業技術の体系化を研究する必要がある。

2) 私有林業の経営

私有林業の地域的特性をとらえ、林業構造の改善および山村の振興をはかるために、実証的な根拠をうることを目的としている。

昭和38年度においては、1960年の農林業センサス資料を分析して、私有林業経営を投入、産出および山林の構成状態の3面から検討し、私有林業の地域的な特殊性をとらえた。

昭和39年度においては、森林所有規模により林家を抽出し約50戸について調査し、これらを比較分析した。

近い将来に林業構造改善事業の対象となると考えられる町村あるいは林野率、人工林率などから調査結果に普遍性をもてると考えられる町村を選出し、各町村の社会、経済および自然な立地条件を調査する。

この研究をすすめる上の問題点としては、経営基盤として公有林野の経営、生産基盤としての林道計画、あるいは林業労働など社会経済的な諸問題との関連において考察する必要がある。

3) 材積表、収穫表の調整

立木材積表については、昭和34年から研究に着手したが、各樹種の真材積と材積表で求めた材積の差を統計的手法を用いて検定を行なった。その結果をもとにして、現在県で用いられている新しい立木材積表がつけられた。

収穫表については、山梨県下の各種収穫表をとりまとめ、メートル法に統一して刊行した。

新しい測樹法、たとえば立木の本数をかぞえるプロットレスサンプリング法あるいは一変数による材積の査定法などを検討し、これらの方法を応用して立木材積表をつくる必要がある。

立地条件、材積表については、森林立地の研究成果をとり入れて林木の生長との関係を数量的につかみ、地位の判定基準を明らかにする必要がある。

また最近、急速に開発された新しい測樹用機器、たとえば年輪幅を精密に測定するデンドロメーターなどを購入する必要がある。



6. 木 工

郷土みやげ品の試作

昭和38年から39年にわたり、木工みやげ品10種類について430点を試作した。その主なものは富士山木彫壁かけ、シクナゲ葉形ペン皿、武田菱紋様入菓子皿、胴張形菓子皿セット、オードブル盛分皿、これらを昭和39年夏2回にわたり、富士五湖周辺および甲府市で販売試験した。その結果、富士山の壁かけが観光客および販売店の間で一番評判がよかった。木工みやげ品の生産意欲についてききとり調査をおこない、もっとも関心が深かった南都留郡鳴沢村で講習会を開き、富士山壁かけの技術指導をおこなった。

昭和40年3月受講者によって郷土みやげ品生産者組合が結成された。

今後ますます観光客の増加が予想されるので、県下各地において講習会を開いて木工みやげ品の生産技術指導をおこない、山村経済の振興に寄与したい。その際に競合による共倒れを防ぐために、技術の普及指導とともに経営活動における指導をもおこなう必要がある。



試 作 品

7. 調 査 ・ 広 報

1) 研究成果の刊行

当場で得た成果を刊行し、関係ある諸機関へ配布している。

2) 文献、図書の保管

寄贈された文献および購入した図書を保管しているが、図書以外の冊子は製本し、特殊図書館式と受入順式により配列している。文献の分類は日本十進分類法によりパンチカードを用いて整理している。

3) 普及用資料

サービスセンターとしての性格から、当場の研究成果および新しい知見を基にした普及用の資料を作り、その都度、「林業やまなし」に投稿し、行政機関ならびに林家に熟知してもらっている。

林業試験場の業績

昭和二十九年四月一日現在

1. 研究発表

1) 林業試験場報告

- 津久井高明 (1944) : 水掛採草地に於ける牧草種子播種に関する試験 山梨林試報 1, 1~12
- 渡辺武夫 (1949) : 富士山麓鳴沢村外 4 村カラマツ人工部分林生長量調査について
山梨林試報 2, 1~36
- 八代雄蔵 (1950) : 天然林択伐更新試験成績 山梨林試報 3, 1~20
- 香山 彊 (1950) : 餌木誘引に依るマツ害虫の生態調査 山梨林試報 3, 21~68
- 八代雄蔵・坂倉正之 (1951) : 立枯病に関する 2, 3 の実験 山梨林試報 4, 1~14
- 小野 馨 (1951) : 富士山北麓に於けるカラマツ腐心病に関する調査 山梨林試報 4, 15~30
- 香山 彊 (1951) : 伐根に於けるマツ喰虫の生態調査 山梨林試報 4, 31~42
- 坂倉正之 (1952) : カラマツ苗木の生育と磷酸加里の効果について 山梨林試報 5, 1~14
- 小野 馨 (1952) : 蛍光誘蛾燈によるコガネムシ類の誘殺試験予報 山梨林試報 5, 15~27
- 山崎丈三・渡辺忠雄 (1953) : 円筒式合板について 山梨林試報 6, 1~7
- 山梨県林業試験場 (1953) : アカマツ林の間伐試験 山梨林試報 6, 8~13
- 古越隆信 (1953) : 船津登山道 (富士) に於ける樹木の垂直的分布 山梨林試報 6, 14~20
- 八代雄蔵 (1953) : 2・4-D による苗畑の除草 山梨林試報 6, 21~39
- 安藤愛次 (1953) : 「巨大ポプラ」のサシキ 山梨林試報 6, 40~44
- 安藤愛次 (1953) : トゲナシニセアカシヤのサシキ 山梨林試報 6, 45~46
- 安藤愛次・小島俊郎 (1957) : 土壌の性質と林木の成長 (1) B_a, B_b 型土壌とスギ林
山梨林試報 7, 1~7
- 安藤愛次・小島俊郎 (1957) : 林木の根系 (1) ヒノキ林の土壌型による根の量
山梨林試報 7, 8~12
- 保坂義行 (1957) : スギ苗灰色黴病の発生と空気湿度との関係 山梨林試報 7, 13~19
- 保坂義行 (1957) : 粉剤によるスギ苗灰色黴病予防について 山梨林試報 7, 20~27
- 安藤愛次・古越隆信 (1957) : 薪炭林内における牧草の栽培 山梨林試報 7, 28~32
- 安藤愛次・小島俊郎 (1959) : 林地肥培固形肥料の施用量試験 山梨林試報 8, 1~43
- 古越隆信 (1960) : アカマツの接ぐ位置とその後の栄養生長 山梨林試報 9, 1~7
- 安藤愛次 (1960) : 追肥がスギ苗木のそだちとかたちに及ぼす影響 山梨林試報 9, 8~14

- 安藤愛次・遠藤 昭・海川好友 (1960) : スギ, メタセコイアの活着に及ぼしたカンバツの影響
山梨林試報 9, 15~19
- 安藤愛次・小島俊郎 (1960) : 林木の根系 (5) カラマツの若木におよぼした施肥の影響
山梨林試報 9, 20~27
- 遠藤 昭 (1960) : 根株腐朽と立地 (1) 天然生コメツガ林の根株腐朽と土壤の性質
山梨林試報 9, 28~35
- 安藤愛次 (1962) : 中部山地の林地生産力に関する研究 とくに山梨県を中心にして
山梨林試報 10, 1~174
- 阿部昌夫 (1962) : 天然生カラマツに対する経済的採材法の研究 (第 1 報) 幹曲線に対する
直交多項式のあてはめ 山梨林試報 11, 1~8
- 古越隆信 (1962) : カラマツの天然木とブラス木の選抜 山梨林試報 11, 9~34
- 安藤愛次・山根隆徳 (1962) : 固形肥料によるアカマツ, カラマツ林の肥効
山梨林試報 11, 35~40
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬 (1962) : 1961年に山梨県下に発生した寒害について とくに
スギ, ヒノキの場合 山梨林試報 11, 41~46
- 安藤愛次・小島俊郎 (1962) : 林木の根系 (9) 11年生スギ林の根系 山梨林試報 11, 47~52
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1962) : 山梨県におけるヒノキのトックリ病の環境調査
山梨林試報 11, 53~58
- 阿部昌夫 (1964) : 山梨県私有林業内生産活動における地域性 山梨林試報 12, 1~30
- 小島俊郎 (1964) : 主要林木の根系分布に関する研究 とくに土壤条件との関係について
山梨林試報 12, 31~61
- 林 良次 (1965) : 市場距離と立木価格との関係について 山梨林試報 13, 1~8
- 斎藤敬文・古越隆信 (1965) : 外国産マツ類の育苗に関する研究 山梨林試報 13, 9~21
- 小林福治・遠藤 昭 (1965) : 植栽方法に関する研究(1) 山梨林試報 13, 22~29
- 渡瀬 彰 (1965) : 苗畑における土壤線虫の防除 山梨林試報 13, 30~36
- 石原義久 (1965) : 木工みやげ品に関する試験 山梨林試報 13, 37~44

2) 日本林学会誌

- 浅川林三 (1939) : 矮林の萌芽に関する研究 (第 1 報) 伐採季節と萌芽との関係
日林誌 21 (7), 350~360
- 安藤愛次・小島俊郎 (1957) : 土壤の性質と林木の生長 (3) シラベの35年生林
日林誌 39 (4), 136~138
- 安藤愛次 (1958) : 山地の推定気温表とその応用 日林誌 40 (10), 467~468

- 安藤愛次 (1959) : 土壌の性質と林木の生長 (6) 富士山のシラベとウラジロモミ林
日林誌 41 (8), 285~290
- 安藤愛次 (1960) : 苗畑でのウラホルム肥料の効果 日林誌 42 (3), 103~105
- 安藤愛次 (1960) : キリのそだちと気象との関係 日林誌 42 (7), 265~268
- 阿部昌夫 (1962) : 生長率を測定するための2つの新しい公式について 日林誌 44 (3), 73~76
- 安藤愛次・小島俊郎 (1962) : 造林地への除草剤の施用 日林誌 44 (5), 150~153
- 安藤愛次・小島俊郎 (1962) : 富士山における微地形とカラマツ, シラベ幼令林の生育
日林誌
- 青島清雄・林庸夫・遠藤昭 (1963) : 雨水害にともなうカラマツの幹ぐされ
日林誌 45 (4), 125~126
- 遠藤昭 (1963) : 根株腐朽と立地 (2) 富士山東北麓の天然生針葉樹林の根株腐朽と微地形
日林誌 45 (8), 269~271
- 陣野好之・遠藤昭 (1964) : *Coleosporium eupatorii* ARTHUR によるキタゴヨウマツの葉さび病について 日林誌 46 (5), 178~180

3) 日本林学会大会講演集

- 安藤愛次 (1956) : カラマツ苗の葉色と成育 65回日林講, 178~180
- 安藤愛次・小島俊郎 (1956) : 林木の根系 (2) スギ, アカマツ若木の根の分布
65回日林講, 159~161
- 安藤愛次・古越隆信・依田和幸 (1956) : 土壌の性質と林木の生長 (2) 2, 3 土壌型と
ヒノキ林 65回日林講, 117~119
- 安藤愛次 (1956) : 苗畑でみられた葉の変色 66回日林講, 90~92
- 古越隆信 (1957) : 富士山の樹木限界における樹型変異 67回日林講, 202~206
- 安藤愛次 (1957) : 苗畑へのファイトメーター法の応用 (予報) 67回日林講, 190~192
- 安藤愛次・小島俊郎 (1957) : 林木の根系 (3) 2, 3 針葉樹の根張りと細い根の分布
67回日林講, 192~195
- 安藤愛次・山根隆徳 (1958) : 苗畑へのファイトメーター法の応用 68回日林講, 163~165
- 安藤愛次・小島俊郎 (1958) : 林木の根系 (4) シラベとウラジロモミ幼令林の比較
68回日林講, 210~213
- 安藤愛次・小島俊郎・海川好友 (1958) : 土壌の性質と林木の生長 (4) 天然生ウラジロモミ
の生育状況 68回日林講, 104~106
- 安藤愛次・遠藤昭 (1958) : 土壌の性質と林木の生長 (5) ちがう母材にそだったヒノキ林
68回日林講, 106~109

- 安藤愛次 (1958) : ポドゾルの分布と推定の年平均気温 68回日林講, 109~110
- 安藤愛次 (1959) : 変色したカラマツ苗の水耕 69回日林講, 207~209
- 安藤愛次・小島俊郎 (1959) : 林木の根系 (6) 黒色土に造林した若木の根
69回日林講, 212~214
- 安藤愛次・小島俊郎 (1959) : 土壌の性質と林木の生長 (7) 八ガ岳の黒色土壌とカラマツ林
69回日林講, 134~137
- 安藤愛次 (1959) : 山梨県の育林区をわけるころみ 69回日林講, 132~134
- 安藤愛次・海川好友 (1959) : クリ品種の地方適応性試験 69回日林講, 278~280
- 安藤愛次・大津邦博 (1959) : ジベレリンによるキリの生長促進 69回日林講, 314~317
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1959) : ヒノキのトックリ病と土壌の理化学性 69回日林講, 360~361
- 阿部昌夫 (1960) : 秩父山系のカラマツ林分に対する使用材積表の検定 70回日林講, 66~68
- 安藤愛次 (1960) : 育苗したあとの土壌の性質 70回日林講, 200~202
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬 (1960) : 土壌の肥沃度とメタセコイアの生育
70回日林講, 181~183
- 安藤愛次・小島俊郎 (1960) : 林木の根系 (7) ヒノキ, カラマツ若木の根の分布
70回日林講, 128~130
- 安藤愛次・小島俊郎・遠藤 昭・渡瀬 彰 (1960) : 土壌の性質と林木の生長 (10) 小仏層に
そだったスギ, ヒノキ林 70回日林講, 141~143
- 安藤愛次・小島俊郎 (1960) : 土壌型によるミヤコザサの葉の大きさ 70回日林講, 138~140
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1960) : ヒノキのトックリ病と土壌の理化学性 とくに理化学性について
70回日林講, 355~358
- 古越隆信 (1961) : カラマツの外面的変異と生長, 落葉の早晚, 樹皮および枝条型
71回日林講, 214~216
- 矢沢頼忠・安藤愛次 (1961) : ウラジロモミの林地へのジカマキ 71回日林講, 253~255
- 安藤愛次・小島俊郎 (1961) : 林木の根系 (8) 施肥量と植栽密度を異にしたアカマツと
カラマツ 71回日林講, 90~92
- 安藤愛次・小島俊郎 (1961) : 土壌の性質と林木の生長 (11) 大菩薩峠付近の黒色土壌
71回日林講, 124~127
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬 (1961) : ストローブマツの適地性に関する考察
71回日林講, 88~89
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1961) : カラマツ稚苗の立枯病防除について 71回日林講, 271~272
- 安藤愛次・小島俊郎 (1962) : 林木の根系 (10) メタセコイアとカラマツ若木の根
72回日林講, 129~131
- 安藤愛次・小島俊郎 (1962) : 熔岩流に客土造林したシラベ若木の生育と根系

- 72回日林講, 131~133
- 安藤愛次・小島俊郎(1962): 富士山におけるカラマツ, シラベの混植 72回日林講, 251~252
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬(1962): 林木の生育と土壌の性質 (19) 36年生のヨーロッパトウヒ林 72回日林講, 133~135
- 遠藤 昭・渡瀬 彰(1962): 樹種によるナメコの発生比較試験(予報) 72回日林講, 434~436
- 小島俊郎(1962): 土壌の理化学性とアカマツ, カラマツ苗の根系 73回日林講, 133~135
- 小島俊郎(1962): 立地条件とカラマツ壮令木の根系 73回日林講, 135~138
- 遠藤 昭・渡瀬 彰(1962): 根株腐朽と立地 (3) 秩父山地と富士山の天然生針葉樹林 73回日林講, 246~248
- 安藤愛次(1963): 中部山地の林地生産力に関する研究 とくに山梨県を中心にして 74回日林講, 1~4
- 遠藤 昭・小島俊郎・雨宮嘉彦(1963): 土壌の性質と林木の生長 (18) 土壌型のもがうヒノキ林 74回日林講, 111~113
- 安藤愛次(1963): 山梨県におけるスギ, カラマツ林の生産力の推定 74回日林講, 187~188
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬(1963): 1962年に山梨県下に発生した寒さの害について とくにスギ, ヒノキの場合 74回日林講, 205~207
- 遠藤 昭・駒谷智慧子(1963): 山梨県におけるシラベの育苗 74回日林講, 261~263
- 小島俊郎(1963): 造林したアカマツ幼令木の根系 74回日林講
- 遠藤 昭・渡瀬 彰(1963): 樹種によるナメコの発生比較試験 74回日林講, 438~440
- 安藤愛次(1964): カラマツ, シラベ混交林における生育と微地形との関係 75回日林講, 181~182
- 遠藤 昭・古越隆信(1964): 富士山県有林におけるカラマツ花芽の虫害分布 75回日林講, 410~412
- 安藤愛次・遠藤 昭・馬場勝馬(1964): 寒害跡地におけるスギ3系統の造林成績 75回日林講, 330~332
- 安藤愛次・遠藤 昭・馬場勝馬(1965): 推定土壌図および適木図の作成 76回日林講
- 安藤愛次・遠藤 昭・雨宮嘉彦(1965): 万沢林業地帯におけるスギ, ヒノキの生育と立地 76回日林講
- 古越隆信・斎藤敬文(1965): 発芽試験方法に対する検討 常法と還元法について 76回日林講
- 古越隆信(1965): 外国産マツ類の産地と幼苗の形態 76回日林講
- 林 良次(1965): 私有林業における労働投下量の配分 76回日林講

遠藤 昭・渡瀬 彰 (1965) : カラマツ花芽に寄生するカラマツメタマバエの防除
76回日林講

遠藤 昭・渡瀬 彰 (1965) : シイタケ優良系統の選抜 76回日林講

4) 日本林学会関東支部会講演

山崎丈三 (1952) : 花崗岩質禿禿地に於ける復旧爆破工法 日林関東支部会 (3回)

八代雄蔵 (1952) : 2・4-Dに依る苗畑除草について 日林関東支部会 (3回)

香山 彊・坂倉正之 (1952) : カラマツ苗の生育に及ぼす磷酸加里の影響について
日林関東支部会 (3回)

八代雄蔵 (1952) : 富士山麓の霜崩れについて 日林関東支部会 (4回)

香山 彊・坂倉正之 (1952) : 富士山北麓の採草地実態調査 日林関東支部会 (4回)

安藤愛次 (1952) : アカマツ稚苗の菌根と養分吸収について 日林関東支部会 (5回)

栗田憲二・鈴木 正・安藤愛次 (1952) : フサビの生育と作土性質について
日林関東支部会 (5回)

山崎丈三 (1953) : アカマツ林の間伐試験結果 日林関東支部会 (6回)

安藤愛次・八代雄蔵 (1953) : クヌギの頭木作業 日林関東支部会 (6回)

安藤愛次・深作哲太郎 (1953) : スギのマキツケ苗の生長に及ぼす化学肥料と堆肥の影響
日林関東支部会 (6回)

安藤愛次 (1953) : 巨大ポプラのサシキ 日林関東支部会 (6回)

古越隆信 (1953) : 富士船津登山道における樹木の垂直的分布 日林関東支部会 (6回)

山崎丈三・渡辺忠雄 (1953) : 円筒式合板について 日林関東支部会 (6回)

古越隆信 (1954) : 日野春栗 日林関東支部会 (7回)

安藤愛次・古越隆信 (1954) : 2, 3 枯殺剤の効果 日林関東支部会 (8回)

安藤愛次・小島俊郎 (1954) : 富士山西北麓の黒色土 日林関東支部会 (8回)

安藤愛次 (1954) : 富士山アカマツ, カラマツ林の森林土壌 日林関東支部会 (8回)

安藤愛次・小島俊郎 (1955) : B_c, B_d 型土壌とスギの根系 日林関東支部会 (9回)

安藤愛次 (1955) : 土壌型と林木の生長 日林関東支部会 (9回)

安藤愛次・遠藤 昭 (1955) : 標高別にみた森林土壌の性質 日林関東支部会 (9回)

古越隆信・竹内紀元 (1955) : 禿禿地の土壌改良効果の一例 日林関東支部会 (9回)

保坂義行・渡辺森雄・渡瀬 彰 (1955) : しいたけ稚木の浸水時間と子実体発生について
日林関東支部会 (9回)

安藤愛次 (1958) : 土壌の性質と林木の生長 (6) 富士山のシラベとウラジロモミ
日林関東支部会 (10回)

- 安藤愛次・遠藤 昭・海川好友 (1958) : スギ, メタセコイアの活着におよぼした旱魃の影響
日林関東支部会 (10回)
- 安藤愛次・小島俊郎 (1958) : 林木の根系 (5) カラマツの若木におよぼした施肥の影響
日林関東支部会 (10回)
- 安藤愛次・小島俊郎 (1959) : 花崗岩地帯の特異な土壌型 日林関東支部会 (11回)
- 安藤愛次・小島俊郎 (1959) : 土壌の性質と林木の生長 (8) シラベとコマツガの天然生林
日林関東支部会 (11回)
- 安藤愛次・小島俊郎・遠藤 昭 (1959) : 土壌の性質と林木の生長 (9) 安山岩の黒色土とカラマツ林 日林関東支部会 (11回)
- 阿部昌夫 (1961) : 生長率を予測するための2つの新しい公式について
日林関東支部会 (13回)
- 安藤愛次・小島俊郎 (1961) : 林木の根系 (9) スギの根系におよぼした施肥の影響
日林関東支部会 (13回)
- 安藤愛次・小島俊郎 (1961) : 造林地への除草剤の施用 日林関東支部会 (13回)
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬 (1961) : 1961年に山梨県下に発生した幼令林の寒害
日林関東支部会 (13回)
- 遠藤 昭 (1961) : 根株腐朽と立地 (2) 富士山東北麓の天然生針葉樹林の根株腐朽と微地形
日林関東支部会 (13回)
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1963) : くん煙剤によるスジコガネ類の捕殺 日林関東支部会 (15回)
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1963) : 根株腐朽と立地 (4) 富士山西北麓の天然生針葉樹林
日林関東支部会 (15回)
- 安藤愛次・雨宮嘉彦 (1964) : 層位の不完全な土の分布 地形図による推定
日林関東支部会 (16回)
- 遠藤 昭・渡瀬 彰 (1964) : BHCの空中撒布によるカラマツマダラメイガの防除試験
日林関東支部会 (16回)

5) そ の 他

- 古越隆信 (1957) : 富士山にあるカラマツの立型とはい型について私はこう考える
林業技術 183, 25~28
- 佐治秀太郎 (1958) : エネルギー代謝率から見た林業労働 林業技術 192, 16~22
- 八代雄蔵 (1960) : クヌギの頭木林 林業技術 223, 44~47
- 小島俊郎 (1960) : 技術的にみた有名林業 (その4) 万沢林業 林業技術221, 42~45
- 小島俊郎 (1960) : 万沢林業 技術的にみた有名林業第1集 33~42/152P, 日林技協

- 古越隆信(1961) : 山梨県の天然カラマツ 林業技術 232, 27~29
- 安藤愛次(1952) : ワサビの施肥について 山林 316, 28
- 安藤愛次(1959) : 山梨県林業試験場の現況と将来の抱負 山林 898, 30~35
- 安藤愛次(1960) : 中部山岳地方の造林 山林 912, 15~20
- 安藤愛次(1964) : 林地生産力の推定 植えた木はどのくらいに育つか 山林 956, 4~9
- 古越隆信(1964) : 欧米の林木育種 山林 967, 42~47
- 安藤愛次(1959) : 林業苗木への Phytometer 法の応用 山梨作楽会報 3, 2~4
- 安藤愛次・馬場勝馬(1960) : 追肥がスギ苗木のそだちとかたちにあげぼす影響
山梨作楽会報 5, 10~14
- 安藤愛次・小島俊郎(1960) : 林木の根系 山梨作楽会報 5, 14~16
- 小島俊郎(1960) : 森林土壌の現地研究会 山梨作楽会報 6, 9~20
- 安藤愛次・小島俊郎(1961) : 山梨県における林地肥培について 山梨作楽会報 7, 4~9
- 安藤愛次・小島俊郎・馬場勝馬(1961) : 外国樹種導入例 山梨作楽会報 7, 10~14
- 遠藤 昭(1964) : シラベ苗木の生長と土壌水分 山梨作楽会報 10, 24~28
- 古越隆信(1958) : 山梨県の採種園造成状況と今後の問題点
山梨林試 試験場だより 1, 1~6
- 渡瀬 彰(1958) : 椎茸の不時栽培について 山梨林試 試験場だより 2, 1~2
- 佐治秀太郎(1959) : エネルギー代謝率から見た林業労働 山梨林試 試験場だより 3, 1~3
- 渡辺利一(1959) : 塗装作業における中毒の危険性について 山梨林試 試験場だより 4,
15~16
- 渡辺利一(1959) : 木工試作品の紹介 山梨林試 試験場だより 4, 18~20
- 安藤愛次(1959) : 苗木の葉色による栄養診断法 山梨林試 試験場だより 5, 21~24
- 古越隆信(1959) : 竹林の育て方 山梨林試 試験場だより 5, 24~27
- 遠藤 昭(1959) : カラマツ落葉病について 山梨林試 試験場だより 5, 28
- 岩間平治(1959) : 水害防備林について 山梨林試 試験場だより 6, 29~30
- 小島俊郎(1959) : 森林土壌とその指標植物 山梨林試 試験場だより 6, 30~32
- 安藤愛次(1959) : 山火事の消火剤 山梨林試 試験場だより 6, 32
- 海川好友(1959) : クリタマ蜂について 山梨林試 試験場だより 7, 35~36
8, 39~40
- 岩間平治(1959) : 桐樹の栽培について 山梨林試 試験場だより 7, 33~35
- 小島俊郎(1959) : トウヒ属の種類と見分け方 山梨林試 試験場だより 8, 40
- 馬場勝馬(1960) : メタセコイアとスギの生長量について 山梨林試 試験場だより 9,
41~42
- 小島俊郎(1960) : オガクズ堆肥について 山梨林試 試験場だより 9, 44

- 八代雄藏 (1949) : 赤城山の崩壊地の霜崩れについて 前橋営林局治山研究会 報 1, 1~4
- 安藤愛次・深作哲太郎 (1953) : スギ播種苗の施肥用量試験 東大演報 44, 1~4
- 安藤愛次 (1959) : 山梨県の野鼠被害 森林防疫ニュース 8 (8), 136~137
- 小島俊郎 (1959) : 北口浅間神社境内のシダ植物 山梨県立博物館研報 2, 1~4
- 安藤愛次 (1960) : 山梨県林業試験場における施肥に関連する試験と調査 森林と施肥 10, 13~15
- 安藤愛次 (1964) : 事業的肥培林の調査と試験林の設定 森林と肥培 33, 6~8
- 安藤愛次・小島俊郎 (1960) : 層断面の観察と分析の結果 土性と腐植の含有量 森林立地 1 (2), 53~56
- 安藤愛次 (1960) : ジベレリンのキリ栽培への実用化試験 第3回ジベレリン研究発表会抄録 139
- 小島俊郎 (1960) : ハコネコメツツジの地理的分布 箱根博物会報 139
- 安藤愛次 (1961) : 山地の気温, 降水量の推定とその応用 ペトロジスト・シンポジウム 要旨集, 25~31
- 安藤愛次・小島俊郎 (1964) : シラベとコメツガの天然生林 ペトロジスト総会資料 (4月) 42~44
- 安藤愛次・小島俊郎 (1964) : B₀, B_D型土壌とスギ林 ペトロジスト総会資料 (4月), 44~45
- 兩宮嘉彦 (1964) : ヒノキの生育と土壌の性質 ペトロジスト総会資料 (4月), 46~47
- 安藤愛次 (1961) : ジベレリンのキリへの実用化試験 第4回ジベレリン研究発表会抄録
- 古越隆信 (1961) : 山梨県におけるカラマツ採種園 林木の育種 18, 7~8
- 古越隆信 (1964) : 欧米の林木育種事情 林木の育種 29, 6~8
- 小島俊郎 (1961) : 富士山北側のシダ植物 山梨県立博物館研報 6, 1~8
- 小島俊郎 (1961) : 積翠寺附近のシダ採取覚え書き 山梨生物 13, 3~4
- 小島俊郎 (1961) : 植物の生活型からみた天城と丹沢の関係 箱根博物会誌 1, 7~10
- 安藤愛次 (1962) : 耐寒性のクローンを 林木の育種 20, 5
- 古越隆信 (1957) : 精英樹の選抜 林業やまなし 7, 8~9
- 安藤愛次 (1962) : 林を風から守るために その1, 林業やまなし 25, 2~4
- 安藤愛次 (1962) : 林を風から守るために その2, 林業やまなし 26, 4~6
- 安藤愛次 (1962) : 林を風から守るために その3, 林業やまなし 27, 6~7
- 安藤愛次 (1962) : 林業試験場 林業やまなし 27, 9~10
- 遠藤 昭 (1962) : 質問に答えて アカマツ造林地のウサギの被害防除法 林業やまなし 27, 12
- 遠藤 昭 (1963) : 質問に答えて 苗畑における土壌線虫病の診断法 林業やまなし 29, 14

- 遠藤 昭 (1963) : 梅雨どきの苗畑管理 とくに病虫害の防ぎかたについて 林業やまなし 30, 6
- 古越隆信 (1963) : 米国研修だより 林業やまなし 30, 14
- 遠藤 昭 (1963) : 質問に答えて, 壮令林への肥培効果 林業やまなし 30, 16
- 遠藤 昭 (1963) : 質問に答えて, クズの防除法 林業やまなし 31, 13
- 安藤愛次 (1963) : スギ, ヒノキ造林地の寒害 林業やまなし 32, 2~3
- 安藤愛次 (1963) : アカマツの鉢付苗による造林 林業やまなし 32, 12
- 遠藤 昭 (1964) : 質問に答えて, 椎茸栽培 林業やまなし 33, 12
- 古越隆信 (1964) : 今年の養苗に対する反省, 発芽の悪かった理由について 林業やまなし 34, 5
- 遠藤 昭 (1964) : 質問に答えて, 立枯病と苗畑管理 林業やまなし 34, 11
- 遠藤 昭 (1964) : 質問に答えて, スギ, ヒノキ造林地の枝打 林業やまなし 35, 14
- 林 良次 (1965) : 林木かぞえあげ法 その1, 林業やまなし 36, 6
- 遠藤 昭 (1965) : 質問に答えて, クリの種子貯蔵法 林業やまなし 36, 13
- 斎藤敬文 (1965) : 植栽に際して 林業やまなし 38, 8
- 遠藤 昭 (1965) : 質問に答えて, 苗畑の土壤病害の防除法 林業やまなし 38, 13
- 林 良次 (1965) : 林木のかぞえあげ法 その2, 林業やまなし 39, 12
- 小林福治 (1965) : 夏場の造林地の手入れ 林業やまなし 40, 9
- 石原義久 (1965) : 郷土みやげ品の指導 林業やまなし 40, 13
- 遠藤 昭 (1965) : 質問に答えて, カラマツ球果の害虫 林業やまなし 40, 14
- 小島俊郎 (1962) : 山梨シダ通信 (1) 日本シダの会会報 57, 1~3
- 林 良次 (1964) : アメリカの人と林業 (1) 実務的なアメリカ人 現代林業 1, 40~47
- 林 良次 (1964) : アメリカの人と林業 (2) 広い国土のアメリカ 現代林業 2, 44~51
- 林 良次 (1964) : アメリカの人と林業 (3) アメリカ林業の一断面 現代林業 3, 28~34
- 林 良次 (1964) : アメリカの人と林業 (4) アメリカの大学教育 現代林業 4, 42~51
- 林 良次 (1965) : アメリカの人と林業 (5) 学生と教授の生活 現代林業 5, 48~57
- 林 良次 (1965) : アメリカの人と林業 (6) アメリカ的林業役人 現代林業 6, 40~49
- 林 良次 (1965) : 人手不足が生んだ植栽方法の改善 林業新知識 136, 10~13
- 古越隆信 (1964) : カリフォルニアの林木育種, 北海道の林木育種 6 (2), 21~24
- 石原義久 (1964) : 富士山の壁かけ 全国試験場作品展 出品目録 (11月), 36~38
- 安藤愛次 (1964) : 養分欠乏のいろいろ, 写真に見る林地肥培 (9月), 写真提供

2. 業績広報

1) 林業試験場刊行物

- 山梨県林業試験場(1949～)：事業報告 昭和24年度より毎年刊行
 山梨県林業試験場(1954～)：適地適木調査報告書 昭和29年度より毎年刊行
 山梨県林業試験場(1943)：純粋培養種菌による椎茸栽培について P 24
 山梨県林業試験場(1950～1954)：林業ノート No. 1～No. 21
 山梨県林業試験場(1953)：国有林における林業実務の現況 P 65
 山梨県林業試験場(1954)：天然林の取扱いについて P 23
 山梨県林業試験場(1954)：富士山植物園ラベル台帳 P 28
 山梨県林業試験場(1955)：ひのき枝打の手引き リーフレット
 山梨県林業試験場(1956)：しいたけ、なめこ栽培の楽 リーフレット
 山梨県林業試験場(1958)：山林の効果的な高度利用について 山梨県懸賞論文集 63～69
 山梨県林業試験場(1958)：山中ゴルフ場の土壌性質 富士山麓電鉄パンフレット 9
 山梨県林業試験場(1958)：研究計画についての概説 P 33
 山梨県林業試験場(1959)：山梨県育種事業概要 P 9
 山梨県林業試験場(1960)：山梨県主要樹種林分収穫表 P 43
 山梨県林業試験場(1960)：材積表の検定について(第1報) P 18
 山梨県林業試験場(1961)：材積表の検定(第2報) P 27
 山梨県林業試験場(1961)：材積表の検定(第3報) P 35
 山梨県林業試験場(1962)：材積表の検定(第4報) P 19
 山梨県林業試験場(1960)：スギ育種苗畑の概要 P 13
 山梨県林業試験場(1964)：土地分類基本調査 飯沢 P 82
 山梨県林業試験場(1964)：海外研修報告(欧米の林木育種) P 36

2) 検定業務

年度別検定件数

項 目	年 度												
	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
林木種子の発芽検定	13	49	59	25	39	40	42	52	27	49	59	35	53
苗畑土壌の検定	11	15	17	18	4	8	36	39	37	32	188	54	86

3) 文 献 目 録

- 山梨県林業試験場 (1958) : 林業に関する文献目録 No. 1
山梨県林業試験場 (1959) : 林業に関する文献目録 No. 2
山梨県林業試験場 (1959) : 林業に関する文献目録 No. 3
山梨県林業試験場 (1959) : 経営に関する文献目録 No. 1
山梨県林業試験場 (1959) : 経営に関する文献目録 No. 2
山梨県林業試験場 (1960) : キリの文献目録
山梨県林業試験場 (1960) : シイタケの文献目録
山梨県林業試験場 (1961) : 林業に関する文献目録 No. 4

4) テ キ ス ト

- 山梨県林業試験場 (1955) : 煤病とくものす病 P 9
山梨県林業試験場 (1955) : スギ苗の灰色かび病 P 7
山梨県林業試験場 (1955) : 土止めに役立つ草の選び方 P 9
山梨県林業試験場 (1959) : シイタケ, ナメコ栽培について P 12
山梨県林業試験場 (1959) : ナメコ栽培について P 10
山梨県林業試験場 (1959) : 苗木の栄養診断 P 25
山梨県林業試験場 (1960) : 林木の育種 P 28
山梨県林業試験場 (1960) : 苗畑の除草 P 10
山梨県林業試験場 (1960) : 林地肥培について P 21
山梨県林業試験場 (1960) : 森林土壌の見かた P 38
山梨県林業試験場 (1960) : 森林保護 P 10
山梨県林業試験場 (1960) : シイタケの不時栽培 P 3
山梨県林業試験場 (1964) : 森林保護 P 25
山梨県林業試験場 (1964) : 針葉樹の病虫害防除 P 31

5) ス ラ イ ド ・ 映 画

- 山林試スライド (1950) : 椎茸の作り方 49枚
山林試スライド (1951) : 富 土 山 113枚
山林試スライド (1952) : 日野春栗の栽培 62枚
山林試スライド (1952) : 山出苗の出来るまで 35枚
山林試スライド (1952) : ボルドウ液 39枚

- 山林試スライド(1953) : 植物標本の作り方 47枚
 山林試スライド(1953) : 植物の越冬 35枚
 山林試スライド(1954) : 椎茸となめこ 46枚
 山林試スライド(1954) : 工芸彫刻 29枚
 山林試スライド(1955) : 霧柱 34枚
 山林試スライド(1955) : 薪炭林の改良 41枚
 山林試スライド(1956) : 土壌調査 20枚
 山林試グラフ(1963) : 試験場を訪ねて 200フィート(白黒)
 山林試グラフ(1964) : 富士山ろくの害虫防除 400フィート(カラー)
 山林試グラフ(1965) : 明るい農村 100フィート(白黒)
 山林試グラフ(1965) : 木とともに 150フィート(白黒)

6) 標 本

林業試験場標本	種子	70	害虫	170
	植物	830	材鑑	72
	土壌	23	根株腐朽	15
	岩石	275		

7) 模 型

林業試験場模型	地形	8
	シイタケ栽培	5

2. 林業試験場の思い出

林業試験場の30周年に思う

河村柳太郎



山梨県林業試験場の設立30周年記念に当り、太平洋戦争を越える、更にひと昔前の試験場のことなどを思い出します。

私は大正12年から山梨県の山林課に奉職していましたが、県にキノコの種菌培養の施設がなかったので、私の創案した培養種菌移植栽培法を試験することも出来ず、仕事に追われて居りました。

たまたま、野村課長が本県へ赴任され、林業試験場を開設することになり、私はその椎茸主任技手を拝命し、本庁山林課にも兼職を残すこととなりました。

富士吉田に設立された林業試験場で、私が働きだしたのは昭和10年3月からでした。いまだ培養菌糸を移植して栽培する、いわゆる椎茸人工栽培法がなかったときでしたので、この試験場は県としても自慢の試験場であったし、私としても実に得意の研究でありました。今思うと自分ながらよく勉強したものと思ひ出されます。

設立当時は湯山貞技師が場長兼職で定森季夫殿が場長代行をされました。初代の純場長は河合慎二殿で2代目は萩森隆一殿でした。上司の絶大なる熱意と、よき御指導をいただいたのは勿論ですが、身延町の松野弥三郎氏や壺山町の藤原包蔵氏、あるいは甲府市の荻野豊平氏等をはじめ、百数十人の御協力と、御鞭撻をいただき、幸い試験の成果があがり、名声を博したものです。

その名声を挙げるとともに、各地の御支援をいただいたお蔭で、林業試験場といえば椎茸種菌のことを問われ、椎茸種菌といえば県の林業試験場の名が出るほど有名になりました。そして県内の生産者は勿論、県外の役人や林業関係者が、きびすを連ねて参観に来訪し、うれしい悲鳴をあげた思い出もあります。

昭和12年には、私の試験研究による椎茸人工栽培法が世間の有識の士に認められることになりました。とくに農林省の国立林業試験場長藤岡光長博士や北島君造博士の御教導、御支援をうけました。藤岡場長から指名研究費を8年も引続いていたことは、光栄この上もないことでありました。

私はいま郷里の藤枝市に河村式椎茸研究所を設け、引続いて椎茸と共に暮しております。試験場での11年間の研学生活を心からなつかしく思い出しながら筆を置きます。

参 考 林

津 久 井 高 明



毎日のようにB29の大編隊は、高度4,000m位で真夏の晴れた富士を右に迂回し、林業試験場の上空を東に飛び去り、しばらくはゴウゴウとした爆音がなり止まない。それが消えたあと、言いしれない空虚におそわれる終戦直前であった。

ただ1人召集から残されていた私にも、とうとう赤紙が来て、昭和20年7月13日国土防衛隊である赤城隊に入隊することになった。試験場には兵役に全く関係のない萩森場長、河村技師、大村主事が残されるだけとなった。

召集を受け一番心残りであったことは、林業試験場が吉田林務署に吸収されるのではないかと一戦争のあさ中では林業の本質を守るなどと言うことは不可能であった。至上命令として生産増強を強いられていた行政機関の現実の中に同居することは、よほどシモンがない限り存続はむずかしいと思ったからである。

事実、根っから素人のわたしが薪炭係に廻されて、毎日督励に走り廻っていた。そうした6月の或る日、本栖の参考林でモミの巨木が伐採され、駄馬によって丈三ものがズリ引きされていた。その光景を見たときほど腹立たしい思いをしたことがなかった。それはB29が飛び去って行ったあとのあの空虚な気持と同じでもあった。人命さえ量的思考の中で扱われていた戦争のさ中では、富士の自然の中で数百年の樹令を重ねた巨木であっても、そして、本栖部落の人々が保護することを不分律として来た参考林であっても、木材統制会社と言う手段の前には、管理者である林業試験場の存在理由などかえりみられるはずもなかった。

それにしてもマツダケ人工栽培試験地となっていた、千代田村（現甲府市）の末木真平氏のアカマツ林が、強制伐採の対象になったところ、末木氏が早速に東京帝大の菌草学教室にこの話を持ち込み、大学の試験地にしてもらって、この難をのがれたことは痛快であった。末木氏は勝沼町奥野田の風間岡右エ門氏とともに試験場のキノコ栽培指導員として県下の指導に当たられた。気骨の士であった同氏は千代田村長在職中に他界されたと聞くが、ここにその冥福を祈りたい。

退職後20年——すべてが大きく移り変わった。戦争末期には異質的存在とまでなった林業試験場が、その自主性と本質を取り戻し現在のように発展したことはまことに慶賀にたえない。林業試験場は学術研究の場であるとともに、林業技術の普及センターであるという立場を認識され、さらに飛躍的な発展を願って止まない。

林業試験場の揺籃期



小越 稲田

山梨県の林業試験場は府県としては全国で2番目に設立されたと記憶していますが、上吉田の町外れの静かな場所に、その時代としてはモダンな形態の建物が建築されました。内部は一般林業研究室、木工試験室、椎茸種菌研究室、事務室、その他付属建物となっております、場長代理定森技師以下10人位の職員で全国注視の中に創立されました。

私は創立間もない昭和13年に赴任し、場長代理指揮の下に試験研究機関としての設備充実に要する諸問題や、内容の向上と充実のための経費の獲得に明け暮れたのでありますが、時の職員一同は一九一となって毎日夜の更けるのも忘れ、総力を傾注して働いたのであります。中でも椎茸品種の改良と種菌の培養や木工試験で優良な製品を出して好評を得たことについては、椎茸の河村技師に配する津久井技師、木工の一条技師に配する伏見技師はみんな公務員離れた変った存在で、試験研究のみに生甲斐をもった人達で、その存在が成果となって表われたのでありましょう。

いつの世も直接収益が伴わず人目に立たないものは軽視され勝ちであります、林業のように長い年月を要する試験研究は社会人に忘れられるのは当然であります。ところが全国にも数少ない機関として早く発達したことと森林県山梨の特異性もあって、その存在に大きな期待がかけられたのであります。したがって配された後継者各位は高度の技術をもつ専門の人材が登用され、この方々の勢と力の結晶により本日の隆盛をみるに至ったのでありましょう。

ここに創立30周年を迎えるに当り、今昔の感切なるものがあります。今30年の久しきに亘り、その掌にあたられた方々に対し、深い尊敬と感謝をいたす次第であります。

大戦下の林業試験場



萩 森 隆 一

小生昭和38年に退職し現在香川県森林組合連合会に務めております。筆無精のため、旧知の皆様方にはたいへん失礼して申しわけありません。

河合先輩の後をついで、山梨林試へ転任しましたのはつい先日の様な気がしてなりません。当時は日支事変から世界戦争にうつる寸前、とうとう戦争中を吉田で過してしまいました。兼林務署長という関係で木炭、木材の統制とこれらの増産が本務のようで、青木ヶ原、富士の原始林(天然記念物)などもこの目的のため伐採し、今から考えると冷汗ものでした。

こう言ううちに米山支店長、本栖薪木炭組合長、ドクター等の熱心な顔がうかんできます。青木ヶ原は南方のジャングルに似ているというので、陸軍の演習のための折衝などが多く、試験場の仕事は職員、署員の出征がぼつぼつあり、物資不足で一時休場のような状態でした。たゞ椎茸菌の生産は何とかつゞけ、とくに河村技手は満洲へ軍属待遇で二ヶ月ほど椎茸栽培の指導に行かれたのが思い出されます。

昭和19年には会議室が陸軍の特種部隊の隊長室兼事務室となり、このころから毎日B29の銀翼を富士の彼方にながめて暮しました。まったく一生忘れることのできない5年間でした。

おわりに林業試験場の再建につくされた渡辺、山崎両氏の御努力に感謝して筆を置きます。

岳麓の思い出

渡 辺 武 夫



終戦の直後、私は試験場長兼吉田林務署長として富士吉田へ赴任した。家内もあと1月で出産というのに、涼しい処なら良からうと一緒に連れこんだのだった。当時としては立派な官舎で、庭から富士山が心ゆくまで眺められ、良い処だと喜んだのだが、食糧難の時に食糧不足の地とは知らずに飛込んだのには面喰った。甲府の人達は当時吉田を敬遠していたことを後になって知った。

役所へ出て試験場の仕事を何かしたくても物資不足でなかなか手が出ない。従来からの椎茸菌の培養を続けるつもりが、ガラスビンが不足だ、試験管が無い、といった状態でおまけに培養室の屋根がいたんで雨もりをする、これを修繕しようにもトタンが入手出来ない。まったく戦争中の野戦病院以上に苦勞した。しかし何んとか小野馨君や渡辺森雄君の努力で仕事をつづけたのだった。

岳麓の主造林木であるカラマツについて調べたが、結果を印刷することが思うにまかせず、やっと試験場報告を出したのも忘れられない。しかも原稿用紙は朝日新聞の駐在員高田氏から分けてもらった。買いたくても買えない時代であった。一番大きな思い出は、陛下の行幸であろう。終戦の直後であり、しかも戦後はじめての行幸というので、県をあげて準備したところ台風で中止となり、二度目に標本を作るため椎茸のホダ木を本栖から運んでやっと御覧に入れた。

このような仕事の思い出とは別に、美しい自然の中に住む楽しさを忘れることができない。今でも年に一度は河口湖の展望台へ上り、岳麓一帯を眺めて楽しんでいる。茶屋のオヤジに精しいねと云われ、内心得意になっている。

岳麓も年とともに発展してゆく昨今、30年の歴史をもつ試験場が面目を一新しても良いのではないのでしょうか。安藤場長を中心に諸氏が活躍されんことを祈ります。

トウモロコシ

香山 彊



八百屋の店先にトウモロコシが並ぶ頃になると、私はいつも富士吉田での生活をなつかしく思い出します。橋向うのオッチャンにもぎたてのモロコシをわけて貰い、こんがりと焼き上げてはかじりついていたあの甘い味、東京ではなかなか味わうことができません。また、トウモロコシの実の熟する頃は夏山の終りを告げる火祭り、よい祭りの夜をいろいろ富士山の山小屋から吉田の町まで連なるかがり火の列、そのかがり火の灰に埋めて焼いたモロコシの味も忘れることはできません。もう一つトウモロコシにつながる思い出と言えば、私が山梨林試にお世話になっていた頃（昭22秋～昭27夏）、とくに前半はまだ食糧難で、米は配給になるとたちまち食べてしまい、後は鳴沢から仕入れてきたモロコシの粉を団子にして味噌汁に入れたり、お湯で練った粉をうすくのぼし、七輪の火であぶって喰べていたものでした。当時は味けなく切ない思いをしたものでしたが、今では若き日の思い出の一コマとしてなつかしく思い出します。

私がお世話になっていた頃の場長は前半が渡辺武夫さん、後半が山崎丈三さんでした。学校を出たてで西も東もわからず、ただ血の気の多いだけの私をお2人の場長さんをはじめ場員の皆さんが、暖かく導いて下さった事を深く感謝しております。吉田にいた5年間はいわば私の人生の出発点であり、この時期を楽しく愉快に過ごすことのできたことは私にとってまことに幸せでした。吉田にいた頃、私が鳴沢に出かけるとよく雨が降ったので雨男といわれていましたが、今でも私のいる目黒の林試から人が行くと「雨男の香山は元気であるか」と保護組合の書記さんに関われるそうで、それを聞くたびに大変なつかしく、鳴沢あたりの山を歩いてみたいと思います。しかし、なかなかチャンスがなくて残念です。今もこうして筆をとっていると中ノ茶屋まで松喰虫の調査に通っていた事、富士山の二合目で八代さんと2人で道に迷い野宿を覚悟し、夜9時半すぎに皆に迎えにきて貰った事などが昨日のここのように鮮やかに浮んできます。

与えられた紙数もなくなりました。山梨林試の今後の発展を祈りつつ筆をおきます。

「育苗担当者の弁」

坂倉 正之

戦後の混乱はやや落ちついたとはいっても食糧不足とインフレが続き、サラリーマンはいわゆるタケノコ生活に苦しんでいた昭和23年5月、林試の研究スタッフに加わった。以来27年12月まで足かけ5カ年間の富士吉田での生活は、いろいろな意味で貴重な体験となり、多くの思

い出を残している。

試験場での私の仕事は、主として育苗試験であったが、当時の試験場は戦時中ほとんど中断されていた試験業務を整備し、店舗をととのえることに全力を注いでいた。

育苗関係では試験場の裏にあった樹木園の一部を苗畑として、カラマツ、アカマツの育苗試験、日野春栗、クルミの苗木増殖を主として行なった。県内における育苗の実態のなかから研究テーマに選定するという研究体制が確立されておらず、したがってこのような意味から考えれば、本当に県の試験研究機関としての役割を充分果たしていたとは云えず、むしろ研究費の裏付けとして収入をあげることに多くの精力をついやさねばならなかった。そのため諏訪の森の国有地を借用して苗畑を拡張し、財源収入をうるための苗木生産を不木意ながらおこなった。

それでも26年度に、林業改良普及事業が発足し、研究機関の必要性が一般に認識されるようになり、日野春の県営苗畑に育苗試験地、南巨摩郡内船村にスギの挿木育苗試験地が設けられ、しだいに研究活動の分野が広がっていった。また富士山が植物分類の研究に好適な場であり、我々の活動の場でもあった関係から、植物標木の蒐集と分類を仕事の一つとして手がけた。この仕事は育林技術研究の基礎として大いに意慾をもやしたが、せっかく身につけた基礎を研究活動に役立てることなく、一身上の都合から試験場を退いたことは今でも心残りに思っています。

しかし後任の皆さんにより私達の果しえなかった分野が大いに開拓され、着々とその成果を取められていることは御同慶に存じます。

30周年を記念すると共に今後一層のご活躍をお祈りしたい。さらに普及事業と試験研究機関とがお互いに手を取りあって、山梨県の林業が発展することを望んで止まない。

耐寒性人種

八代雄蔵



今年は異常気象とかで寒い夏を迎えた。しかしこの頃のように暑くなる
と勝手なもので、寒いぐらいの夏がよいなとも思ったりする。甲府でも肌
寒いような時に吉田ではどんなだったのだろうか。

私をはじめ吉田へ行ったのは22年12月だった。何もかも不足の当時、
燃料だってお多聞にもれない。ましてはじめての土地である。寒さはひとしお身にしみた。寝
ている布団の襟に翌朝は霜がつくといわれるほどの寒さではたまったものではなかった。

吉田へ来るまでは私は土壤凍結やら、霜柱やらとりくんでいた。今思い出してみると資料
の大部を戦災で失って、ろくな報告もできなかったのが残念であるが、そうした経験にとりく
んでいた以上、寒さには相当強いと思っていたのに、これではぜんぜん駄目である。最初の冬

を親子3人、ほんとうに心細い思いで送ったものだった。

2年目からはそれでも慣れてきた。自分の専門ばかりするわけにはいかなかった当時では、冬になって始めて昔からの仕事に手をつけることができた。現金なもので、そうなると寒さもあまり感じなくなる。道志、忍野の霜崩れ、御坂の土壌凍結など面白いものだった。前橋局管内の赤城山の霜柱、土壌凍結などの調査を依頼されたり、道志の治山事業所からの相談をうけたり、実験したのもこの寒さのおかげだった。こうして知りあった方々とは今でもおつきあいをしている。よい友人を得たのも寒さのおかげだったといえようか。

寒い仕事を終えて試験場へ帰ってくると、残っていた人達が温かく迎えてくれたのも楽しい思い出である。吉田を離れて約10年、それでも今の私は他の人ほど寒さを感じないようである。吉田の寒さで何年かを訓練したため、耐寒性の強い人種にでもなってしまったのだろうか。

創立30周年に想う

山 崎 丈 三

最近10カ年ほどの間に全国的に多くの県が林業試験場や指導所を設立して、林業や林産加工の技術的向上に強い意欲を示してきていることは、まことに喜ばしい傾向であります。しかしなかには県主脳部の十分な理解がなく流行を追うアクセサリー的存在のものもあり、また独立採算制を強いられて研究機関としての活動が十分に出来ず、したがって利用もされずに優秀な研究員が脾肉の嘆をかこっているところもあるやに聞いております。この点山梨県は、恩賜林経営という大任の自覚のもとに林業試験場が設置されただけに、試験場での研究成果が県内林業に貢献しておりまして、地方研究機関としての在り方については広く全国的に注目されてきたものであります。

歴史的には鹿児島、山梨、兵庫とその創立は最も古いものでありますが、その永い間に残してきた数々の業績はまことに輝かしいものがあり、けっして他に遜色のないものと思います。現に山梨県林業試験場が全国の地方研究機関の代表的なものの一つとして、自他共に認めている所以でもあります。このことは林業が県内産業の重要なウェイトを占めている山梨県にあっては当然なことかも知れませんが、しかしそこにはやはり行政面の要求と、それに応える試験場研究員の真摯な気持と闘志があつて、その両者の呼吸が正に一致していた賜物と思います。

こゝに創立30周年を迎えるに当り、その擦然たる歴史に万雷の拍手を送るとともに、今後も一層業界に利用される試験場として発展される一方、全国地方研究機関の牽引車となって、一般水準の向上に寄与されることを心から祈り、また願うものであります。

岳麓の思い出

宮郷吉之助

私は昭和29年7月から1年半の試験場生活でしたが、その1年半は20年余りの山梨県庁の生活でもっとも印象深い思い出となりました。

第1に名峰富士を朝な夕なに眺め得たこと、第2に夏のきわめて涼しく快適であったこと、第3に冬がまたとなく寒いこと、第4に富士山を中心とした高山林施業の対象となる県有林の多いことなどあげれば数限りありません。私は試験業務については素人でしたが、場員に現在の場長安藤君をはじめ若い有能な場員が多くおられて、試験場としての使命を何とか達成し得たことは場員各位の努力の賜で、今でも感謝しています。

私の在任中の事業としては椎茸種菌の純粋栽培、カラマツ腐心病の調査、森林土壌調査の開始、林地肥培試験、林木育種技術の開拓、草地の改良試験、黒色土壌の造林試験、観光土産品の展示会を甲府で開いたことなどです。

試験場在任中、もっとも楽しかったことは、1年の試験計画を樹立する時と、試験成績をとりまとめて試験場成績報告を発行する時である。試験計画を検討する時の場員諸君の気力に満ちたあの顔、また成績を発表する時のあの嬉しそうな顔はまったく印象深いものがある。そのほか私生活の面でも僅か1年半であったが、まったく場員各位と私的に親しく交際していただいて、どこの時代よりも一番試験場時代が懐しい。あの時からもう10年あまり経過したが、今でも時々現在の安藤場長が私宅に立寄って泊っていただくことなど思い出す。

山梨県の林業試験場は歴史が古いばかりでなく、その内容においてもわが国の林業試験研究の最先端を行っていることは、自他ともに認めるところであるが、今後の一層の御健斗を祈って止みません。

回 顧

玉 木 廉 士



山梨県林業試験場は本年度創立30年になり、この機会に記念出版を計画されることになった。まことに御同慶に堪えぬことである。

私は昭和30年1月場長を拝命して、大阪から転じたが、公立林業試験場としてはもっとも歴史の古いものの一つで、かつ高名な試験場であったので、喜んで赴任したものである。しかし赴任して見ると、庁舎は創立当時林務署に一部を借したのが、その後の機構改革で、林務事務所となりますます狭隘となり、赴任当時試験場は辛うじて庁舎の一部を占

抱していたに過ぎなかった。これでは双方ともに支障があるので、林務事務所の移転を希望したが、幸にもその機運にあったこととて、きわめて円滑進捗して試験場の単独の庁舎となった。

しかし今まで長年狭隘な場所にいたため、試験場として恥しからぬ施設がなかったもので、これら施設の充実が焦眉の急務であったが、当時県は極度に財政の逼迫した時であった。そのため必要な予算の配布は困難で、林務部長の好意ある計いによって、2カ年分割で不十分ながら施設拡充費を得ることができた。これによって化学実験室と菌類実験室との分離、土質試験室の新設、文献資料の整備と図書室の新設を計画実行し、さらに林木育種用の温室まで建設し得たことは、たいへん思い出の深いものがある。

もちろん、すくない予算でこれだけの施設ができたことは、場員とくに安藤、古越、小林の諸君の執念とも言うべき熱意があったからである。一応の整備を見たところで、私は農林省林業試験場に転じた。その後、優秀な研究者である安藤、古越、小島の諸君に新鋭を加えて、輝かしい業績があったことは私のひそかに誇とするところである。

その後2代を経て安藤君は場長に榮進し、研究員の指導に当っておられることは、まことにその人を得たことと思う。場長の経綸によりますます施設の充実と、研究員の指導育成とによって、名実ともに全国公立試験場の白眉たることを念願するものである。

私が職を辞してすでに7カ年を経過したが、まだ昨日のここのような気がしてならない。世の移り変りの早いことを思い感無量である。

土 壤 調 査

海 川 好 友



このたび林業試験場が30周年を迎え、記念誌を発刊されますことを心からお喜び申し上げます。

私も僅かな期間ではありましたが、貴場に席をおきましたので、当時の思い出をふり返ってみたいと思います。私が昭和32年に吉田林務事務所に転勤してから、たびたび試験場を訪問しては当時の研究テーマや、仕事の内容など興味深く聞いたり、見たりしているうち、現場長や小島さんのすすめによって、翌年の6月に造林研究室にお世話になりました。

当時は土壌調査が主体でありましたから、私も現場長をはじめ、職員一同の懇切な指導をうけたり、また、身延山においては、全国から集った精鋭とともに、国立林業試験場の土壌関係のエキスパートである橋本先生により1週間に亘って学科と実地について、みっちり講習をうけ、ようやく人なみの土壌調査のできるようになったものです。

この時とくに感じたことは、林業というものは、自然を相手にするので、何よりも現地で自分から直接手を下し、体で修得することがたいせつであるということでした。このことは一生忘れられない勉強でした。

土壌調査は全県下から毎年数カ所を選んで、最盛期にはほとんど全職員が参加し、7月から8月にかけて夏休みの大学生のアルバイトを引きつれ、重い調査用具一式をそれぞれ分担して背負い、山男を自負したものです。短いときでも10日、長いときには1カ月も外業に従事したのですが、こんなときには、頭が山ぼけてか、試験場に帰って机に向っても筆をとることが億劫になるのが落ちでした。

また、土壌調査のあい間には、メタセコイアや、ストロブマツの現地適用試験を手がけたのですが、その後の結果を興味深く、楽しみにしている今日この頃です。

想　い　出

高　部　浩



「光陰矢の如し」で林試も30周年を迎えることになりご同慶にたえません。かつての在職者の1人として往時の体験を寄稿するようとのことで、文字どおり思い出を書綴りました。

私が林試にご厄介になったのは昭和35年4月から37年5月までである。この約2年間、出納員として庶務会計を担当し2人の場長さんにお仕えした。すなわち貴族的で学究的な佐治さんと、野人的で行動的な高橋さんである。両場長の温かいご理解とご指導を受けて、私は在任中伸び伸びと仕事ができた。

古自転車1台しかなかった試験場にジープ、テラー、リヤカーなどの機動力も備わり、苗畑も区画整理を施し、傾斜と砂礫を除去し、温室も重油バーナー式に改造し寒冷地にふさわしいものにすることができた。また、暗室の床や壁もコンクリート張りの永久施設とし、ボイラーも解体整備し、無菌室も改造した。さらに書庫を修復し、創立以来25年間の保存書類を分類整理した。

また忘れられぬものの1つに35年8月の台風襲来がある。その日は万一を慮かり宿直員の他に私も泊ることとしたが、果せるかな夕刻より暴風雨となったので、木工部倉庫内の板材を利用し庁舎と職員住宅の戸や窓の補強工作を行なった。しかし、台風はついに住宅の1棟のトタン屋根を剥ぎ取ってしまった。たまたま小島技師（現在農林省林試）宅もあり、産後数日後の奥さんと赤ちゃんが休んでいたので、暴風雨のあいだ、屋根の上に天幕シートを張ったりして惨々な目にあった思い出もある。

この住宅も先般取払われ、今は鉄筋4階のモダンな県職員アパートが建っているのも時勢の

移り変りであろう。

林業試験場員を語る

山梨県林試は全国林試の中でも古い歴史をもつ仲間の1つである。そして古いだけでなく、良き人材が揃い地味な試験研究にとり組んでいる。私は今でも、ときおりお邪魔して旧知の方々から有益な助言をいただき現在の仕事に役立てているが、あのいかにも林業試験場らしい丸太造りの玄関を跨ぐたびに、良き上司と良き同僚に囲まれて過した2年間の楽しさと懐しさがよみがえるのである。

曲り角に来た林業といわれて大分年月を経たが、山積する課題が1日も早く解明されるよう、より一層のご精進とご努力を願ってやまない。

初老の弁

高橋 清



智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい……………

これは草枕の冒頭の1節だが、いつの時代も住みにくいことに変わりはないらしい。人生50才をすぎると、人の世の住みにくさも窮屈さも余り苦にならなくなる。とかく浮世はこんなものとあきらめの方が先に立つ。昔から40にして「不迷」50にして「天命を知る」といわれているが、40にして「不迷」の方は凡人は首をかしげさせるが、50にして「天命を知る」方は大いにうなずける。人生行路の終着駅までの料程も運賃も途中の風景も大体計算できるので、何事にも軌道からはずれないように自制を心掛ける。

人生50年といわれた頃は、40才ともなれば「初老」といわれ、老人の仲間入りをさせられたそうだが、現在は平均寿命が延びたので通用しそうもないが、58才ともなるとそろそろ老人の仲間入りの準備を始めねばならない。乗物などで若い人に老人扱いされて、とまどうこともあるが、これから先、何年生きられるか解らないが、何事にも無理をせず、出所進退をきれいにし、年寄の冷水の恥をかまずに終着駅に着きたいと思っている。なるべく終着駅におそく着きたいとは人並に考えるが、さりとしていたずらに長命を保つのもどうかと思う。

単なる動物として長生きしても意味がないのではないか、人間として生きたい。動物としてではなく、人間として終着駅に着きたいと強く願っているが、果せるかどうか。

窮を以て節を変せず、

賤を以て志を易えず、

智者は天に逆らわず、また時に逆らわず。

創立30周年を祝う

阿 部 昌 夫

山梨県林業試験場が本年度で満30年を迎えられますことを心からおよこび申し上げます。

私は昭和27年から38年まで満12年間に試験場に勤務しました。思えば場史の実に3分の1に余る長いあいだお世話になり、その間山崎、宮郷、玉木、佐治、高橋、安藤6氏の場長に仕え、直接御指導をいただきました。それぞれ御性格こそ違え、試験研究行政の指導者としてさすがに立派な方達であったことが胆に銘じています。

在職中の思い出としては、大半の9年間をはからずも主事、出納員として庶務の事務を仰せつかりながら、生来の技術屋である私にはどうしてもなじめなく、暇をみては日夜一般経営経済学の書物の乱読に浮身をやつしていた不埒者でした。お蔭でこの出納員時代に専門技術普及員の資格をとることができました。やっと主事と出納員の職務を解放され、約3年間を一研究員として林業経営研究に従事いたしました。その間県有林課の要請によって、山梨県立木幹材積表を統計的処理によって調製いたしました。ついて地域別、階層別林政の必要性という問題意識から出発して、山梨県私有林業の生産活動における地域性を区分する試みについて、若干の検討考案をした結果を報告いたしました。

名実ともに浅学菲才、何一つ県林政に応えうる試験業績もなく慙愧に耐えない次第です。でも恵まれた環境でよく勉強はしました。在職中技術士の資格を得ることができたのも思い出の一つです。退職後出京して全国森林組合連合会に席をおき、コンサルタント活動を続けていますが、試験場で培われた基礎的経営行動のメカニズムが、日常私の執務上の生の教訓として大いに役立っております。こうして試験場勤務の恩恵は実に広く、深いことを今になってしみじみと体験させていただいています。